

希 望 の 大 地 の 戯 曲

北海道 戯曲賞

平成27年度受賞作品集

北海道戯曲賞

平成27年度受賞作品集

北海道舞台塾実行委員会

主 催 / 北海道舞台塾実行委員会 (北海道、公益財団法人北海道文化財団)

希 望 の 大 地 の 戯 曲

北海道
戯曲賞

平成 27 年度受賞作品集

目次

■優秀賞

「ぼくの、おばさん」

作・池田美樹

1

■優秀賞

「終わってないし」

作・南出謙吾

105

選評

191

あとがき

199

優
秀
賞

ぼくの、おばさん

作・池田美樹

登場人物

新城 急一 …… 過緊張の癖がある20歳・大学生。
新城 八重子 …… 急一の叔母・偏屈な40歳。市役所職員。
新城 千代子 …… 急一の伯母・43歳。20年間行方知れず。
井手 信彦 …… 空気の読めない行政書士・43歳。
吉村 よしえ …… 急一の母・43歳。重度の買い物依存症。

■ はじまり

店舗付住宅の居間。

気難しそうな中年女と気弱そうな青年。

「女はブラウスのボタンを一番上までぴっちり留めている。

猫背の青年は時折、足の指を重ねたり外したりして緊張している様子。

食卓を挟んでスーツ姿の男。

端正な背広：に紫色の花柄のネクタイ。メガネのつるの部分も紫色。

部屋の四隅には収納ボックスや雑誌等が乱雑に積み上げられ、天井の隅は雨漏りの跡らしい黒カビで黒ずんでいる。

居間からガラス引き戸を透かして見える店舗部分には、すっかり埃かぶった様子のカウンターと数台のテーブル。

昭和の匂いのする、マリメッコテイストの花柄の壁紙。

テーブルの上には裏張りのやぶれた椅子がひっくり返して載せられている。

※演じ手は常に出ずっぱりで、本役以外の「声」や「効果音」も担当する。

井手 (書類を提示して) 県のほうからは、この金額を提示して頂いています。
 八重子 これ、本当にもらえるんですか？
 井手 税金と解体費用を引いて、このくらいになります。
 八重子 充分です。あ、いつ頃？
 井手 (手元の書類を確認しながら) 工事着工予定が来春(らいはる)なので…早ければ今年中に。
 八重子 ああ。
 井手 で、受け取りの対象となるのは、八重子さんと急一さんと…こちらの…
 八重子 あ、でも、
 井手 あ、もうずいぶん、
 八重子 はい。高校中退してから一度も戻って来てないの。
 井手 ああ…
 八重子 父の葬式も母の葬式も…兄の葬式も、あたしがひとりで出したんです。
 井手 大変でしたね。
 八重子 あ、すみません。…急一、お茶。
 急一 え…
 八重子 (声をひそめて) オモテの自販機で。
 急一 あ、うん。

青年、立ち上がる…も、話が気になり、立ち止まる。

井手 …今も東京に？

八重子 わかりません。
 井手 ただ、書類上はこの方の印鑑がなければ、手続きができないんですよね。
 八重子 ずーっと、何もしてないの？
 井手 え。
 八重子 この人。
 井手 ですよ。です。でも、それとこれとはまた。連絡先は…
 八重子 わかりません。てか、知りません。
 井手 ですよ。でした。その場合……失踪宣告という手段もあります。
 八重子 あ…もう一度お願いします。
 井手 はい、7年以上生死が確認できない場合、裁判所に失踪宣告を申し立てることが出来ます。
 八重子 それは…
 井手 はい、一応もう亡くなられた方として扱う、という。
 八重子 じゃそれが認められたら…
 井手 この方の、すべての相続の権利はなくなります。
 八重子 …それは、だいたい掛かりますか？
 井手 費用ですか？ 費用は、切手代と報告書類併せて…6000円くらいですね。
 八重子 (意を決した様に) ……やります。
 井手 わかりました。
 八重子 はあ…
 井手 え？

八重子
井手

はあ…はあああああ！（奇妙な絶叫）
???

急一

そのときの八重子おばさんの声は、おもしろ動画で見た「ディズニードにつれてってもらえるとわかったときのアメリカの女の子」の声にそっくりでした！

途端、ほとばしり出る急一の心の声。心の中はとても饒舌。
ぐるぐると遊園地のように回り出す脳内。

急一

僕のうちは、駅前から連なる商店街の真ん中。僕が幼稚園くらいの頃まではレストランをやったそうです。
でも反対側の出口にでっかいスーパーが出来てから、商店街ごとさびれてしまっ…

店舗で埃かぶったイスやテーブルやショーケースもぐるぐると回り出す。

急一

僕の記憶の中のレストランは、ずうっと…薄気味悪い自転車置き場です！

八重子

早く売っ払って引越したい！

急一

取り壊せばいいのに。

八重子

お金かかったたい。

急一

壊すのに？

八重子

いくらかかると思う？ 100万で！ こんボロ屋こわすのに100万円！

急一

僕は八重子おばさんが苦手です。なんていうか、すごく決まりに厳しくて、

八重子

（鬱憤をぶちまけるように）そつで隣のフランス人に、「きょうカンカンゴミの日じゃなかですよね？」て言うたと！ そしたら「コマンタレブ？」て！ さんが「コマンタレブ？」か！ おまえ何べん言うたらわかっとか、日本に住むなら日本の決まりば守れええててててててててて

ぐるぐる回っていた景色が、突然ぐうううと遠くなる。

急一

（ぐううと、と遠くなる…意識を、頭を振って取り戻す）あ。……僕、ときどきこうなってしまうんです。ちゃんと聞かなきゃって緊張してしまう話、たとえば、ややこしい学生課の説明とか、

学生課

（無機質に）…で、奨学金には給付型と貸与型があります。また、貸与型には無利子のものと利子のあるものがあってててて…

急一

（ぐううう…）く。…ちゃんと聞けよ、ちゃんと！ なのに声がとおおお

くなる。皆が遠くなるんじゃないかと、自分がびゅうと、すごいスピードのルンバに乗せられて、引き離されるみたいな感じで、

ててててて

ととととと

ばばばばば

耳がおかしいのか頭がおかしいのか、病院に行ったほうがいいのかなんて思うんだけど、

八重子
：とにかくあたしはそんなフランス人ば許さんと思たと。ちょっと、聞いとると？？

急一
あ、うん！ ……こんな八重子おばさんですが、なんでか自分のことはできない。片付けができない。料理ができない。

八重子
(散らかった家の中、あたふたと探し物をしている)

急一
僕が小さい頃は八重子おばさんは近くでひとり暮らしをしてました。でも3年前におとうさんが死んで、ひとりになった僕を心配して同居してくれることになった…んですが、どうにも一緒にいるのがつらくて、今年に入ってから、友達の家で寝泊りしました。でも、友達から、

友人
急一
ごめん、ちょっといいんで、電気代くらい払ってくれる？
あ、ごめん！ ……それでコンビニでバイトを始めたんですが、

店長
急一
(苛立ち) ちよ、そんな感じだとお客さんも緊張するよね。
あ、はい！

店長
急一
ここも面白いから、おでん鍋洗ってくれる？
あ、はい！ ……で、行くのがつらくなって、(店長に電話) すいません、きょう体調不良で…

店長
急一
(超苛) 当日に言われても困るんだけどね。
すいません！ ……で、そんなこんなでケイタイ止まって、学校にも行かなくなりました。お風呂にもあんま入れてなくて、ネカフェで生ゴミみたいな生活してたとき、

友人
おまえもうすぐ試験ぞ。どがんすつとや。

急一
そして久しぶりに学校に行って知りました。僕は大学を……除籍になってました！

授業料が振り込まれてなかったんですね。見れば通帳の残高は……8800円。

そして知りました。退学ならば履歴書なんか「入学↓退学」って書けるけど、除籍の場合、入学自体なかったことになるんですね。僕、結構受験

勉強して、ようやくと受かったときはそれなりに嬉しかったんですけど、そしてそれなりに楽しい大学生活だったんですけど、それすら「なかったこと」になっちゃったんです！

学生課

再三、郵送とお電話でお知らせしたんですが…

急一

な、なんとかならないんですかね、

学生課

もう納期を過ぎているのででででで、

声

この場合いいいいいい、

声

かかかかかかか

声

とととととと

急一

(頭を振る)：…とにかく僕は一旦、自宅に戻りました。玄関には山積みのだイレクトメールに混じって、大学の校章の入った封筒がありました。

自宅。

散らかった家の中であたふたと探し物をしている八重子。日常の風景。

意を決し、怒りをぶつける覚悟をする急一。と、

八重子

は？

急一

は？

八重子

何しに来たと？

急一

てか、ここ家だし。

八重子

くさ！

急一

！

八重子

何のにおい？ あんた風呂入りよると？

急一

ご…ごめん。(気を取り直して強い声で)てかさ、これ。

八重子

？

急一

俺、大学除籍になったんだけど。

八重子

？

急一

なんで教えてくれなかったと。

八重子

なんで教えなんと？

急一

は？

八重子

…

急一

一応、保護者でしょ？

八重子

ハタチ過ぎて何ば言いよつと。

急一

じゃ、何？

八重子

関係者ですが。

急一

は。

八重子

血縁関係者ですが、それだけです。では失礼します。…あ。

急一

なに。

八重子

携帯代、何とかして払って。連絡取れんとか超迷惑なんで。じゃ！

ぴしゃりと閉まる八重子の自室のふすま。

八重子
もらって。
千代子
だってあたし何もしてないじゃん。
八重子
だから。もらって、困って。
千代子
は。
八重子
好きにすればいいじゃん。寄付したり、飲み食いしたり。とにかくもらって。
千代子
（弾けるように笑う）あんた、ねじくれてんねえ！
八重子
（奥歯で怒りを噛み締めて）おかげさまで。

息苦しい沈黙。

井手
で…では明後日頃までにご家族でお決め頂いて、
千代子
え。
井手
え？
千代子
あたし、明日帰るんですけど。
井手
でも、
千代子
じゃ印鑑預けて行くんで。
井手
いやそれはちょっと。
千代子
えー。
八重子
荷物。
千代子
？
八重子
見てって。あんたの荷物。

千代子
え。
八重子
業者呼んでるんで。昔の荷物、全部捨てるんで。
千代子
要るもんなんてないけど。
八重子
：
千代子
何。
八重子
一応見て。あとからいろいろ言われたらたまらんけん。
千代子
…
…

窒息しそうな沈黙。

急一
鍾乳洞。
千代子
急ちゃん！ ごはん食べに行こう！
急一
え？
千代子
あたしはいつでもいいんで、よろしく！（井手に）
八重子
は？
千代子
何？
八重子
どうでもいい、て何？
千代子
行こう、急ちゃん！
急一
！

■ マック

商店街。

さびれたシャッター街の一角に、マック。

外の景色が見えるカウンターの席に並んで座る。

千代子 (嬉々として頬張りながら) 食べないの？ 食べな。

ハンバーガー、ポテト、シエイク……を、艶やかな爪の指で口に運ぶ千代子。

そのリズムミカルな動きを凝視する急一。

急一 おばさんは、口にものを入れたまましゃべりました。それが、なんだろう、嫌悪感より強烈な何かがあつて…

かぶりつく、飲み込む、そんな口元ばかり見てしまいました。(生唾ごくり)

千代子 この商店街にマックとかウソみたい！ 中学校のときのあたしに教えた

らきつと狂喜乱舞！

急一 あ…あつちにケンチキもあります！ ちよつと行くと吉牛とやよい軒。

へええ！

急一 ど、どんな商店街だったんですか？

千代子 ここ？

急一 はい。昔。

千代子 むかし！(笑)

急一 あ、

千代子 いや、充分「昔」よね。えー、あそこに八百屋、花屋、魚屋…おばちゃん

パーマ屋、おばちゃん洋服屋！

急一 ザ・おばちゃん商店街！(灰色の商店街を指差す)

へえ。

急一 笑うとそっくり。

急一 え？

千代子 圭一郎。あんたのおとうさん。

急一 ! (鼻の下に手を当てる)

千代子 わあ！

急一 え？

千代子 照れるとさ、すぐ、(真似する)

急一 あ。(慌ててその手を太腿に敷く)

千代子 そこも一緒！(笑)

急一 (リアクション)

千代子 (窓の外を見遣って) すっかり変わっちゃったね。あ、ねえ、どこがどうなるの。

急一 え。

千代子 ほら、このへんが立ち退いちゃったら。

急一 あ、あそこに高速が通って、こっちはジョギングとか出来る公園になるって、

千代子 へええ。(ふと急一をみつめて)

急一 あ、あの、

千代子 ……今なにしてんの。大学生？

急一 だったんですけど…

千代子 やめた。

急一 はい。

千代子 なんだ。

急一 学費を、滞納してしまつて。

千代子 まじで？ もつたない！ あたし高校中退だからさ、大学とか想像もつ

かない。

急一 ああ。

千代子 あたしのこと、聞いてない？

急一 あ、ちよつと。

急一 (心の声) 聞いてます！ しばしば、聞いてます！ 高校を中退して、アイ

ドル目指して上京して、

急一、記憶の畑を掘り返す。何度も聞かされた八重子の愚痴。

八重子 たまーにテレビに出よらしたけど全然売れんで、

急一 で？

八重子 んで、結局AV女優！ あんた、身内にAV女優がおるとよ。身内の恥！

面汚し！

声 えーぶい

声 えーぶい

声 えーぶい ぶい♪

急一 身内にAV女優…！ 僕はなんとも甘美な気持ちになつたものでした。そしてその人が今、ここに…(生唾)

千代子 じゃ、どうすんの。

急一 えっ。

千代子 どうすんの、これから。

急一 あ…考え中です。

千代子 あたしに出来ることあつたら言つてね。

急一 え？

千代子 家族じゃん。(急一の髪をくしゃくしゃとかきませる)

急一 ……！！

千代子 (顔を覗き込む) 何。

急一 あ…ありがとうございます…(涙がこみあげて来る)

千代子 (その頭を軽くはたいて笑う) 何！

急一

千代子

てか八重ちゃんは？

急一

え。

千代子

払ってくれないの、学費。

急一

あ、そういうのは。

千代子

何してんの？ 今。

急一

リンサイ？

千代子

リンサイ？

急一

市役所の。

千代子

八重ちゃんって、銀行じゃなかったっけ？

急一

ああ、なんか昔は。

千代子

むかし！（笑）じゃ昔、やめちゃったんだ。

急一

……

千代子

彼氏とか、いんのかな。

急一

え。

千代子

八重ちゃん。

急一

……
（鼻の下に手を）

千代子

手！

急一

！

千代子

じゃ普段、何してんの？

急一

え。

千代子

八重ちゃん。

急一

ネット？

千代子

ネット？

■ 膠着の日々

急一

八重子おばさんは仕事から帰るといつも自分の部屋に直行します。

急一宅。台所。

ずっしりと重そうな肩掛けカバンで傾きながら八重子、帰宅。

台所を素通りして自室へ。

急一

ふすまが閉まると……すぐにパソコンを立ち上げる音がして、ふすまのすきまからパソコンのあかりが漏れて来る。ごはんもふだんは駅の向こうのスーパリーの安売り惣菜。機嫌がいいときは、

八重子

（ふすまを開けて）ごはん炊いとるけん。そんなカラアゲ、食べてええけん。

急一

……ありがとう。……でも大抵、部屋でひとり。だから僕も部屋でひとり。台所のテレビは、朝からめざまし代わりに点けるだけです。

朝。

「ジップ」的な朝番組が点いている。

ペットボトルのコーラのものを飲みながらぼんやりと眺めている急一。と、

八重子

(冷蔵庫を物色。三個入りヨーグルトをパキッとやぶって一個) ……これ、食べてえけん。

急一

あ、ありがとう。

八重子

(自分も食べる)

急一

…あの…本当にもらえるのかな。

八重子

よかよ。

急一

いや、ヨーグルトじゃなくて、お金。

八重子

は。

急一

あ、うん。立ち退きの。

八重子

井手さんの言わしたろ。言わしただけはもらわるる、そっだけ。

急一

…八重子おばさんはどうすると？

八重子

は。

急一

この家がなくなったら。

八重子

そらどっか探す。

急一

俺は？

八重子

…は？

急一

俺は俺で、探してよかと？

八重子

……なんであたしがあんたの世話までせなんと？

急一

……わかった。

ぴしやりとふすまを閉めてしまう八重子。

■除籍解除

友人

まじで？ すごいじゃん！

急一

僕は友達に、お金がもらえる経緯を話しました。

友人

いくらもらえるの？

友人

じゃひとり暮らし、楽勝じゃん。

友人

ええねえ。

急一

まあね……って、俺、何べらべらしゃべってんだろ。

友人

てか、おまえ学校どうすんの？

急一

どうするって。

友人

戻らないの？

急一

え。

学生課

除籍解除の手続きについて。

学生課
学生課

除籍、
解除、

急一 :つまり、ちゃんとお金払って、もっかい勉強して下さい、というお願いと誓いを学校に出せば、考え直さんこともない、ってシステムがあるんです！ その期限まで、

友人 一ヶ月だよ。書類が届いてから一ヶ月。

急一 えええええええ。僕は必死に記憶を巻き戻しました。

学生課 再三、郵送とお電話でお知らせしたんですが：

急一 なんとかならないんですかね、

学生課 もう納期を過ぎていたのででででで、

声 この場合いいいいいい、

声 とととととと

急一 ここだ！ ルンバになると緊張で把握できない。そして、怖くてもういいかい、聞けない。

声 ですかららららら、

声 るるるるるる、

声 よろしいですか？

急一 あ、はい。…よろしくない！ わかってない！ でももう一回聞くことが出来ない。これでいろいろ失敗して来ました。…：学費っていくらだっけ。

友人 後期だけだと…：40万くらい？

急一 よんじゅう…

友人 ちようどよかつたじゃん。

友人 もらえるんでしょう、お金。

急一 そうだ。でもあれはひとり暮らしを始めるための…あれ？ どっちが大事なんだろう、大学とひとり暮らし。いや、ギリギリまで考えよう。だって、(記憶の畑)

千代子 あたしに出来ることあったら、言ってね。

急一 え。

千代子 家族じゃん。

急一 それがダメだったら、その次は…

まったりした感じの中年女・よしえ、登場。

急一宅・台所。よしえと八重子。

よしえ ……だけくん、きりたんぼとか食べたことなかでしよう？ そしたらネット
トでぐうぜえん。

もろてよかと？

八重子 こがくんあつても食べこなさんけん。よかったらもろてえ。

急一 これは僕のおかあさん。僕の中学3年、高校受験の真っ只中に、（記憶の畑

…の中のよしえを掘り返す）

よしえ （よしえなりに深刻な雰囲気）圭ちゃん。

何？

圭一郎 ごめん、もうここでは暮らせん。

よしえ は？

圭一郎 ごめん。

よしえ 男がおるとか。

圭一郎 ごめくん！

急一 ……って出て行って、隣町で再婚しました。重大事件なのに、なんでか僕は

あんまり記憶にありません。それから僕の高校3年、大学受験の真っ只中
に、

よしえ 圭ちゃんが倒れたたて本当ですか？

八重子 ひと足遅かったね。

よしえ 圭ちゃん…圭ちゃあああん！

急一 おとうさんのお葬式でいちばん泣いてたのはおかあさんでした。これま
た重大事件なのに、あんまり記憶がありません。以来ちよくちよくうちに
来て八重子おばちゃんとしやべって行くようになりました。…おかあさ
んはいつもお金に困っています。理由は簡単、買い物し過ぎるからです。

よしえ ネットはやバイよねえ、ついポチッてしちゃうもんねえ。

八重子 ああねえ。

よしえ 俊ちゃんにみつかつてまじ怒鳴られた♪（首をすくめ、屈託なく笑う）

急一 俊ちゃんっていうのは今の旦那さんです。おかあさん曰く、やさしい以外

にとりえのない人、だそうです。

よしえ なくんかもう限界。

八重子 （ため息）もう聞き飽きた。どうせ別れんとだろ？

よしえ ふうん。（曖昧な返事）

急一
ため息つきながらも一緒にいる。これはクラスの女子でもよく見掛けるんですが、仲がいいとか気が合うとかじゃなくて、ただ一緒にいる、あの感じ。男子にはわからないあの感じ。

八重子
別れてどうすると。
よしえ
もう水商売で齢でもなかもんねえ。
八重子
無理かな。
よしえ
熟女バー？
八重子
そがんとあると？
よしえ
知らんけど。もう売れる身体じゃなかもんねえ。
八重子
腎臓売る？
よしえ
そっち？（緩笑）ね、千円おばさんて見たことある？
八重子
千円おばさん？
よしえ
見たことなか？ 駅のとこにたまあに立つとらす売春婦の…ばあさん。
八重子
ばあさん！ 千円でさせらすと？
よしえ
そう！

急一
千円おばさん！ 知ってる！ 高校のときヤンキーの男子たちが、
ヤンキー
千円おばさん！
ヤンキー
千円で出来（でく）つとや？

ヤンキー
うん。ばってんまじ怖えけん。
ヤンキー
おまえ、したと？
ヤンキー
うん。ばってんあら、肝試しばい。
ヤンキー
怖え！
よしえ
もうね、おばさんていうよりおばあさん。幽霊んごたる。
八重子
まじで？ でもそつでもやめられんとかな。
よしえ
それしかなかつたらねえ。
八重子
そがんなつても、人て、生きときたかとかなあ。

声
千円
声
千円で
声
どうですか？ 千円で。
よしえ
てか！ 千代ちゃん帰って来たて？
八重子
ああ、うん。

急一
おかあさんと千代子おばさんは中学の同級生。ヤンキー仲間だったそうです。

声
えーぶい
声
えーぶい

声 えーぶい ぶい♪

急一、視線を移す。…と、台所の流し台で歯を磨いている千代子。
薄暗い水場、なま白い、無防備な、すっぱんの顔。

急一 …！（擬視）

■流し台

千代子 おはおう。（おはよう）

急一 お！…おはようございます。

千代子 おのこつく、うかつえいい？（このコップ、使っていい？）

急一 あ、どうぞ！

急一 僕は歯磨き粉のこびりついた口元に釘付けになりました。

千代子、口角の歯磨き粉を指で拭う。

うがい。視線が外せない急一。

八重子 ちょっと！流しで歯あ、磨かんでよ！

仁王立ちで立ちはだかる八重子。うしろによしえ。

八重子 そがんとこ、いっちゃよん変わらんね。

よしえ 千代ちゃあん。

千代子 （よしえに気付く）あらあ！

よしえ 久しぶりい。いっちゃよん変わらんねえ。やっぱ一時期でも芸能人だった人は違うねえ。

千代子 …あんたも変わらんたあい。（よしえの口調を真似る）

急一 …と千代子おばさんは言いましたが…どう見ても同い年には見えませんでした。

千代子 八重ちゃん、あたしの荷物ってどこにあるの。

八重子 店。

千代子 （よしえに向き直って）じゃ、またねえ。（つくり笑顔で手を振る）

よしえ うん、またねえ。（応え笑顔で振り返す）

■空き店舗

ぐるりと回る景色。

急一、台所から店舗につながるガラス戸を開ける…も、歪んでなかなか動かない。ようやっと。

声 声 声

ぎぎぎ
ぎぎぎぎ
が(ぎぎぎ)

急一

僕は久しぶりに…本当に久しぶりに店に入りました。
人が出入りしていないその空間は、ひんやりしてカビくさくて、本当に…
鍾乳洞のようでした。

千代子

…あんだ、ここがレストランだった頃って覚えてる？

急一

あんまし。

千代子

圭一郎はあんたが何歳までやってたのかな。

急一

幼稚園かな。

千代子

そのあとはずっと、

急一

ファミレスのコックさんで。

千代子

そっか。

片付けを始める千代子と急一。

どさっ。ばさっ。ごっこん。

埃・くもの巣・古新聞。

千代子

これがおとうさんの書類、これがおかあさんの洋服、こっちが圭一郎の小

急一

物。死んだ人の荷物ばっかり。

千代子

(千代子の荷物を探している)

急一

ま、あたしもこの家にとっちゃ死んだ人だったんだもんね。

千代子

ですわね。

急一

(高らかに笑う)

千代子

…あ、いえ！ すいません！

急一

あった！ 「千代子のいろいろ」！ …千代子のいろいろ(笑)。これさ、

千代子

お父さんの字！ あ、あんだのおじいちゃん！

急一

(リアクション)

千代子

出して。

急一

あ、はい！

急一、「千代子のいろいろ」をひっぱり出す。

古新聞、ダンボール等の詰められた荷物のいちばん下。苦心。

ピンク色のプラスチックの衣装ケース。

テーブルの上にひっくり返された椅子をおろす千代子。

表面の埃を軽く手で払い、足を組んで座る。

千代子

開けて。

急一

え。

千代子

そのゴミ袋。

急一

あ、はい。

千代子

出して。

急一

え。

千代子

(蓋を開けるように指で指示)

急一

(埃まみれの蓋を開け、中身をひとつひとつ掲げて千代子に見せる)

千代子

捨てる。…すてる。すてる、すてる、すてる。

急一

いいんですか？

千代子

過去の汚点だからね。わ！ そのプリント取って。

急一

(取り出して、渡す)

千代子

ちよ、まじ汚点！ 数学・3点！

急一

これ、何点満点だったんでしよう。

千代子

100点満点の3点。取ろうと思っても取れないよ(笑)はい、捨てる！

…わ！ ね、その黒い封筒取って！

その、「BOXY」って書いてあるやつ！

急一

(取り出して、渡す)

千代子

ちよ、これ、ヒロノブからのラブレター！

急一

ヒロノブ。

千代子

当時のカレシ。見て！ 「おまえは俺のデステニー」って！ カタカナで

急一

デステニー！ 蛍光ペンでデステニー！

千代子

ね、熱烈ですね。今や三児のパパですよ。はい、捨てる！ あ、じゃ、その〇〇〇！

急一

(取り出して、渡す)

千代子

ちよ、これ、〇〇〇！

急一

！

ソフトクリームのイラストのTシャツ、両開きのハイテク筆箱、リカちゃん…

懐かしい80年代の遺物、いくつか。

はしゃぐ千代子。

千代子

じゃじゃじゃ、その茶封筒！

急一

(茶封筒…を探して渡す)

千代子

(封筒の中の書類にしばし見入る)

急一

あの…

千代子

これ、オーデイションの応募用紙！ ……の書き損じ。

急一

書き損じ。

千代子

何通出したかなあ…歌番組とか事務所とか映画オーディションとか。見

急一

て！ 好きな食べ物・いちごクレープ。食べたこともないくせに(笑)

急一

これ、何歳ですか？

千代子

15歳。高1。かわいいでしょ？

急一

お、おもちみたいですね。

千代子

(軽くびんた)

急一

すいません！ …てか、15で東京。

千代子

そう。

急一

勇気ありますね。

千代子

優勝とかして調子に乗ってたからね。

優勝？

千代子 カラオケ大会。町内の。

急一 町内……！

千代子 (笑) おかしいでしょ？ でも中学生はそれでもう、世界に飛んで行けるって思えるのね。

急一 何歌ったんですか？

千代子 「(当時の最新流行歌謡曲)」。

急一 あ……

千代子 知らないでしょ？ すごく流行ってたの。で、お父さん……あ、あなたの

おじいちゃんが大好きでさ、

何かあるとすぐ歌わされたの。

急一 ここで？

千代子 そう。(店内を眺める)

急一 (その横顔に見入る)

千代子 ……でも、そんな思い出も！ はい、捨てる！

千代子、応募用紙を丸めてゴミ袋に放り投げる。

外れる。

急一、拾って袋にと。

急一 今だ、聞け！ 聞くんた、俺！

声

声

声

えーぶい

えーぶい

えーぶい ぶい

急一 じ、事務所とか、入ってたんですか？

千代子 東京で？

急一 はい、

千代子 一応ね。あ、ドラマには何本か出たよ。

急一 どんな。

千代子 東幹久にコーヒー出すウェイトレスの役とか……大鶴義丹に突き落とされた死体の役とか。

急一 ああ……

千代子 毎回、「きょう出るから！」っておとうさんに電話して大騒ぎ！ なのに

ほとんど映ってないの！ 手、とか、

頭のうしろ、とか(笑)

急一 ああ。……それから？

千代子 それから？

急一 いえ、何でも！

千代子 (椅子から立ち上がって衣装ケースの中を覗く)……ろくなもん入ってないなあ……全部捨てちゃって。

急一 いいんですか？

千代子 おす！

急一、衣装ケースの中身を全部ゴミ袋へ。ぎゅっとしばる。

千代子 疲れたあ！ ねえ、ちょっとここ揉んで。

急一 え？

千代子 (椅子に後ろ向きに座って背中を指す) ここ。ゴリゴリってして。

急一 あ、はい…

急一、しばし躊躇…も、にぎりこぶしを作って、背中をゴリゴリ。

千代子 あ…

急一 え？(慌てて離れる)

千代子 気持ちいい。もっとして。

急一 も、もっど？

千代子 もっど。(椅子の背もたれにもたれかかって深呼吸。無防備な後姿)

急一

あ、はい！ ……(にぎりこぶしで再び)おばさんはいい匂いがしました。香水…というか、シャンプー…というか、そのどっちでもないような、いい匂いがしました。

千代子

急一 あースッキリした…ありがとう！
あ、はい！

声

それから？

声

それから？

声

えーぶい。

声

でいーぶい。

声

でいーぶいでいー♪

■いでやえこ

急一宅・居間。

井手・千代子・八重子…と、急一。

井手

……まだお決まりにならないですかね。

八重子

……

千代子

……

急一

…鍾乳洞。

井手

そこをお決め頂かないことには次に進めないですよね。

千代子

要らないから。

八重子

もらって下さい。

井手

：ええっと、一応この後の流れをご説明致しますと、まずは数社の解体業者の見積もりをご検討頂き、解体実施の日程を決定、その間に次のお住まいにこちらの荷物を運んでいただくこととなります。

次、決めてんの？

…

八重子

あれ？ うちに、来られますよね？

井手

え。

千代子

はい、八重さんはうちに。

井手

なんで？？

千代子

あ、いえ。(八重子に) え？ だってこの前、

八重子

あれはだって…

井手

え？

八重子

あ、

急一

？？？

千代子

え？ あんたたちつきあってたんの？

井手

はい。

急一

(即答に驚き、八重子を凝視)

八重子

(慌てて視線をそらして横を向く)

千代子

(井手に) 確認したいんだけど、それは本気ですか。

井手

はい。

千代子

まーじーでー。

井手

はい。

千代子

いつから。

井手

七夕の頃でしたから、もう…3ヵ月？

千代子

出会いは。

井手

合コンです。

千代子

合コン！

八重子

いや、人が足りないって言われて、人数合わせで、

井手

初めて参加したんですけど、よかったです、ほんと。ね、八重さん。

八重子

(横を向く)

千代子

確認したいんだけど、このねじくれた性格で大丈夫ですか？

井手

はい。

千代子

まじで。

井手

はい。

千代子

(すかさず、井手に本気のびんた)

井手

ええええっ？(頬を押さえて千代子を凝視)

千代子

頼んだよ。

井手

あの。

千代子

頼んだよ、まじで！

井手

…はいっ！

八重子

…：…なんでそういうことするかな。

千代子

よかったじゃん、ちゃんとした人で！ よろしく！ ええっと…(以前貰ったはずの名刺を初めてちゃんと)

井手 井手です。
千代子 井手八重子！ 言にくいね、いでやえこ。
井手 出会えであえくみたいな。(時代劇調でぶぎける)
千代子 あんたおもしろいねえ！
井手 おねえさんこそ！
千代子 おねえさん？ あたし、おねえさんか！
八重子 あ、ちよつと気が早かったですかね、
千代子 いいのよ、こういうことはちやつちやつとね、
八重子 あんたは？
千代子 え。
八重子 結婚。
千代子 結婚？ してるしてる。
急一 ！
井手 失礼ですが、名字が。
千代子 まあ、ジジツコンだからね。
井手 というと、
千代子 いろいろあるじゃん？ でも愛し愛されているので問題はないです。
井手 そりゃいいや！
八重子 いくつ？
千代子 ひと干支上。
八重子 は？
千代子 ひと干支。

井手 じゃ。
八重子 55 おお？
千代子 あ、今度来る。こつちに。
八重子 何しに？
千代子 奥様を、お迎えに。
八重子 ……

声 ジジツ、
声 コン。
声 事実上の
声 夫婦、
声 夫婦、
声 生活。

「55歳のジジツコンの夫」と一緒にいる千代子…を妄想する急一。
と、井手。

井手 考えるよねえ。
急一 え。
井手 色っぽいもんね。考えちゃうよ、どうしたって。
急一 あの…
井手 あはははは！(さわやかに笑う)

■タケノコ爆発

振り返ると数時間後。

急一宅。台所。

冷蔵庫からビールを出してプシュッと千代子。

千代子

え、学費？

急一

はい。あ、立ち退きのお金が入ったらお返しするので、

千代子

え。

急一

え？

千代子

なんで？

急一

え？ だって、

千代子

やだ。

急一

え。

千代子

先の見えない男に投資するほどバカじゃないんです。

急一

想像外の答えに僕は怯みました。

千代子

立て替えて欲しかったら、先の見える男になって。

急一

先の見える男。

千代子

そう。

急一

たとえば。

千代子

バイトを決める。住まいを決める。女をつくる。

急一

えええええええ。

千代子

何？？

急一

無理です。特にみつつめ。

千代子

あんた彼女は。

急一

(鼻の下に手)

千代子

手！

急一

！

千代子

女の子キライなの？ したくないの？

急一

好きです！ したいです！

千代子

(リアクション)

急一

でもちよつとトラウマが。

千代子

トラウマあああ？

急一

？？？

千代子

トラウマとか言う奴、あたし超むかつくんですけど！ え？ ね、どんだけ

急一

す、すいません！

千代子

聞かしてもらおうじゃない、トラウマとか言うやつ。

急一

やっぱそんな大したことじゃないかもです、

千代子 聞かしてえ。知りたい、今どきハタチのトラウマ。
急一 やっぱいいです、すいません、もう二度と言いません、
千代子 言ってみな。聞いてやつから。
急一 あいや、ほんっと、もう、
千代子 立て替えないよ、お金。
急一 (すかさず) 中3のとき…

急一・中3の回想。

昼休みの元氣男子たち。

対照的に、カッターで鉛筆の芯を削る的な「孤独な作業」に集中している急一。

中① まじ？ もう、ちゅーしたつや？
中② まじで？ どうだった？
中③ やええばい。(やわらかいぞ)
中② ばああ、ええねえ！
中たち キース キース！

急一 クソ外野、うるせえ。そんな会話にイライラしてたとき、

中① おい。
中② おい。
中③ おい！

急一 え？(生息圏外の面々に声を掛けられて緊張)
中① あのメガネ、おまえのこと好きじゃね？
急一 は？

メガネちゃん ねえ、まじで日にちがないとよ！

急一 合唱コンクール、ちつともまじめにやんない皆の中で、その子はほんつと、懸命にみんなをまとめようとしてました。

メガネちゃん 歌わんとなら出ていって！

急一 ある日の放課後、彼女が叫びました。すると皆がぞろぞろと出て行って…
僕は何て言ったらいいかわからなくて、ただ横に座りました。と、その子が手を重ねて来て…:これは…!

声 キース！ キース！ キース！ キース！

急一 僕の「心の中の外野」が囃し立てました。と、

メガネちゃん ……:

急一 彼女は静かにメガネを外すと僕に…:

メガネちゃん (ちゅーして来る)

急一 !!! 驚いた僕は…! てか僕の! 僕は! …:そんなだけで爆発してしまっただけでした!

股間を抑え、しどろもどろに「ごまかそうとしている急一」。

しかし立ち込める奇妙なニオイ。

そのニオイと不振な挙動によって、状況を把握するメガネちゃん。

メガネちゃん :サイテイ。

急一 とにかく彼女は教室を飛び出して行き、

中② おまえ知つとる? 女子から「タケノコ爆発」て呼ばれとるばい。

急一 は? …:タケノコのニオイ。思春期の男子ならば皆、身をもって知ってるニオイ。僕は立ちくらみそうになりました。学校中の女子が、いや、町中の、日本中の人が、

通行人① あら、ほら、タケノコの。

通行人② ああ、爆発の。

通行人③ やだ、タケノコ! うちの子に近づかないで欲しいわ。

急一 だーれもそんなこと言っていないけど、言ってる気がしました! そして決めました。何があっても学校を休まないぞ! そんな小さな、しかし根深い決意をしました!

千代子 …:…

急一 …:…しました。…:しま…:した。

千代子 えろい。

急一 え。

千代子 えらい。そして、

急一 ?

千代子 どー…:…つでもいい!

急一 !

千代子 それがトラウマ? え? ト라우マ???

急一 いえ。

千代子 え?

急一 いえ!

千代子 だよ?

急一 千代子おばさんは僕の長年の…:トラウマを、から揚げにしました。

千代子

そんなから揚げ、食べちゃいなさい。

急一

あ、はい！ あっつ！（トラウマのから揚げを食べる）

千代子

で、何だっけ。

急一

あ、学費…

千代子

そうそう！ じゃ家とバイトとタケノコ克服。それが出来たら、また相談して！

急一

！

■泡と消える

急一の部屋。友人に電話。

友人

え、アパート？

急一

うん、いくらくらい？

友人

お風呂は？

友人

エアコンは？

友人

オートロックは？

急一

え、まじ？ ……ひとり暮らしってこんなにお金要るのか！ バイトか？ てかいつまでバイト？ 大学に戻る？ でも授業料は？ …みんなどうやって生きてるんだ？

■アパート

急一

翌日、僕は勇気を出して不動産屋さんに行ってみました。痩せて、なんだかすごく人を見下したようなメガネの人がカウンターに座っていました。

不動産屋

（こんな客じゃ儲けにならない、的な空気を醸しだして）…あゝでは家賃はこのくらい、場所はこのへんで限定させて頂きますとととと

声

この条件ではははははは

声

なかなかなかなかなかなか

急一

（頭を振る）

不動産屋

…で、よろしかったでしょうか？

急一

え、あ、はい！ …痩せメガネは一軒のアパートに連れて行ってくださいました。そこは、

カンカンカン…ペンキの剥げた鉄の階段を昇るアパート。

廃墟のような様相に愕然とする急一。

急一

家賃2万円。風呂なしシャワーあり。

左隣の部屋の前には荷ヒモで雑にくくられたパチンコ雑誌が積まれている

て、右隣の部屋からは昼から大きなテレビの音がしてお年寄りの咳払いが聞こえました。…無理！ 絶対無理！

不動産屋

(外国人の「ダメだこりゃ」のジェスチャーで退場)

急一 …家がなくなる。僕は初めて実感しました。帰りたくないのと帰るとこないのは全然違う。居場所。いばしょ。

世間が椅子取りゲームのように見え始める。

椅子が空くと、すかさず誰かが座る。

別の椅子が空く…もすかさず。

どの椅子も獲得できず、情けなく立ち尽くす急一。

■ネカフェ

急一 なんだか家に帰れなくて、またネカフェに行きました。飲み放題のジュースで空腹を満たす。…と、自販機のところで何度も同じ人とすれ違う。

ネカフェ独特の静けさ…と人の気配。

急一 何してる人なんだろう。平日の夕方。スーツ姿の女の人、どう見てもサラ

リーマンじゃないヒゲ面の…50歳くらいの人、ペア席に消えて行く、おじさんとギャル…そして僕。ここが、きょうの、居場所。

頭を抱える急一。と、携帯のバイブ音。

急一君？

あ、はい。

キミ、今なんかバイトしてる？

え？

■怪獣

井手宅。古びた、でも立派な応接室。

井手・千代子。急一。

急一 面接、ですか。

千代子 この子いい子なんです。どうぞよろしくお願いします。

井手 急一君、学部は確か、
経済です。

千代子 …でも、法律も学びたいんです。ね？

急一 …あの、(鼻の下に手)

千代子 手！
急一 !
井手 ま、雑用だから学部は関係ないんだけどね。
千代子 いい仕事しますよ。是非！
井手 よろしく。
急一 え。
井手 じゃ明日から。
千代子 まじで？ 採用決定？
井手 はい。
千代子 よかったじゃん！
急一 ……よろしくお願いします！
井手 (満面の笑顔)
千代子 てかさ、いい家よね。
井手 でかいばかりで。
千代子 掃除も行き届いて。
井手 掃除、好きなんで。
千代子 すごいなあ。うちなんか、
井手 散らかってますよね、いつ行っても。あ、すみません。
千代子 ごめんね。でももう壊しちゃうから。
井手 ですね。
千代子 でき、聞いていい？
井手 え。

千代子 どこがいいの、八重ちゃんの。あ、どこが好きなの、って意味で。
井手 面接ですか。
千代子 早く。
井手 僕、中国のお菓子の、あれが好きなんです。こういう。(身をよじって見せる)
千代子 ねじねじ？
急一 よりより？
井手 そうそう！ あのお菓子みたいな人だなあって。
千代子 八重ちゃんが？
井手 ねじれてて、かたくなで。…日持ちがする感じで。
千代子 それ褒めてる？
井手 (不思議そうに真顔で) はい。
千代子 あんた、すごいよね。
井手 え。
千代子 人の話を、ぐわしゃ！ って掴んで来るよね。
井手 ああ！
急一 え？
千代子 小学校の頃、担任の先生に「怪獣」って呼ばれてました。(楽しそうに)
井手 怪獣。
井手 「井手君は、おともだちのおうちを踏み潰すのが上手よねえ」って。(更に楽しそうに)
千代子 それ、今なら新聞沙汰じゃないかな…
急一 ……そう思います。

井手 これでもずいぶん練習したんですよ。僕のおかあさんがね、人と話してて楽しくなって来たらズボンのここ（縫い目）を握って……（満面の笑顔でフリーズ）
千代子 ?
急一 ??
井手 ……こんな風に、ちょっとだけ我慢しなさいって。それから、言葉に
千代子 ……いい、おかあさんね。
井手 はい。
千代子 お元氣？
井手 死にましたね、3年前に。
千代子 じゃおとうさんは？
井手 死にましたね、6年前に。
千代子 じゃ今、
井手 ひとりです。
千代子 ずっと？
井手 リコンしてからですから、3年ですかね。
千代子 離婚！
井手 はい。
千代子 えーっと、その。
井手 こどもは、いません。
千代子 えーっと、その。あの、八重子は知ってるのかな。

井手 ご存知ですよ。合コン自体が「バツイチ友の会」だったので。
千代子 バツイチ！ 八重子は違うよ。
井手 知ってます。人数合わせで、来られたんですよ。
千代子 （リアクション）
井手 僕、この春初めてぎっくり腰をやりまして。
千代子 は？
井手 てかお風呂場でやっちゃいまして。仕事終わりまして、夜中、さあお風呂に入るぞ！ ってことでガラッと脱衣場の戸を開けまして、こんな感じでシャツ脱いでズボン脱いで、んで靴下脱いで、（再現。身を屈めて靴下を）あ、そこだ！
千代子 いえ！ ここは問題なく。んで浴室の戸を開けて、わあお風呂だあ、つてことで、湯加減をみたら、あつ！（飛び跳ねる）
井手 そこだ！
千代子 いえ、これも問題なく。んで水足して、かき混ぜて、こんな感じで、よおし、入るぞーってとこで、（片手は蛇口・片足は湯船のふちに）
井手 そこか！
千代子 です！ 夜中ですよ。こんな感じ（裸体を強調するポーズ）ですよ。素っ裸でどうしていいかわからず油汗の1時間。やっぱ誰かと暮らしたいなあと。
急一 （あんぐり）
千代子 それはわかる！
井手 でしょう？
急一 ??

千代子

あのさ、あたしの友達で頭の血管切れちゃって、それが朝までででで

井手

ああ、僕の知り合いも心臓ががががががが

声
げぎぎぎぎぎぎ

急一

(頭を振る)

千代子

…で、どこまで。

井手

え。

千代子

お2人の、ご関係は。

井手

清らかな関係です。

千代子

まーじーでー？

井手

はい。

千代子

あたしの勝手なカンだけど…八重ちゃんってその。

井手

え。

千代子

だからあ、

井手

は。

千代子

だからその、男性とね…

井手

…ああ！（照れる）

千代子

じゃ。（手を出す）

井手

え。

千代子

このへんの、スキンシップから順番に、（井手の手をなまめかしく握る）…よろしく。

井手

…はい！

急一

えーっと…そうですね、つきあってれば大人の人だってそういうことになるんでしょけど…あんま想像したくない、というか、なんか静かにお茶とか飲んで欲しい、です。

■なま

急一宅。台所。お茶飲んでる千代子。急一。

千代子

あたし明日帰るから。

急一

えっ。

千代子

でもまた来るから。それまで頼んだから。

急一

何を。

千代子

2人の恋路。

急一

無理です。

千代子

あんた八重ちゃんにシアワセになって欲しくないの？

急一

なって欲しいです、とっくと！

千代子

とっくと？

急一

あや、絶対！

千代子

なんか心配なこととかあったら逐一報せて。

急一
千代子
急一
千代子

了解。
じゃ。
え。
番号教えて。あれでやろう、遠赤外線でピッてしよう。

急一
千代子
千代子
千代子
急一
千代子

で。
千代子おばさんはガラケーでした。……スマホはそういうのできないんで。
え。じゃどうすればいいの。
メールで送ります。
あたしメールしないの。
じゃラインも？
何それ。
じゃ、
電話よ、電話！ 届くかどうかもわかんないもん飛ばすより、直よ、ナマよ。

急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子

ナマ。
じゃ。
え。
は？
あ、ああ、番号！
早く。

急一
090,839...

(目を細め、眉間にしわを寄せて携帯の画面を…老眼)
あ、3と9、逆です。

急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子

(舌打ち)
や、やります。
早く言つて。そういうこと早く言つて。
すみません、(携帯を受け取って素早く入力。渡す)
(受け取って) こういうのは早いね。
すみません、
あ。

急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子

?
またちよつとここ、ゴリゴリしてくんない？(背中を指す)
え。
早く。(無防備に背を向ける)
あ、はい、(おどおどと背中を揉み始める)
あ…

急一
千代子
急一
千代子
急一
千代子

!
あ…うん、そこ。…お、効く！ 上手！
……あの！
ん？
AVに出てたつて本当ですか？
……

急一
千代子

……
……

鍾乳洞。

急一

まずった！ ト라우マ？？ ほんもののトラウマ呼び起こした？？

千代子

うん。

急一

え。

千代子

うん。

急一

あ……芸名は…

千代子

豆栗あずき。

急一

え。

千代子

豆栗あずき。デビュー作「もちもちあんあん」、2作目「まめまめパニック」、引退作「わたしのかしわモチ」。

急一

え。

千代子

リピートシリーズ、デビュー作、

急一

「もちもちあんあん」

千代子

2作目、

急一

「まめまめパニック」

千代子

引退作、

急一

「わたしのかしわモチ」

千代子

（同時に）「かしわモチ」。それで終わり。

急一

え。

千代子

人気出なかったの。かわいかったのにね。

急一

あの。

千代子

？

急一

すいません。

千代子

なんで？

急一

いえ！ ありがとうございます。

千代子

…なんでえ？（笑）

急一

豆栗あずき。僕はその晩…スマホで検索しちゃいました。ひらがな…かたかな…どれでやっても出て来なくて、危ないサイトなんかも飛んでみたら、一件だけ、

声

「豆まめパニック」

声

豆栗あずき。

声

中古ビデオ・150円。

声

ビデオ。

声

ビデ

声

オ

急一

ビデオ！ DVDじゃなくて、ビデオ！

声 声

むかし
むかし・むかし

急一の想像の中で「昭和のアイドルのプロモーション映像」のようにあいらしく歩き出す千代子。

■Vシネ

急一

翌日、千代子おばさんは帰って行きました。てゆつかお迎えが来ました。事実婚の旦那さんは：Vシネに出てくる人みたいでした。そしてそのVシネおじさんとおばさんは抱き合って：チューをしました。あのくちびるで、Vシネとチューをしました。

映画を観るように眺めている急一。

八重子・井手。

八重子

(嫌悪感丸出し)

井手

いいなあ！ ああいうの、いいですよ。

八重子

(吐き捨てるように急一に) こつちに挨拶もさっさんだったね。

急一

え。

八重子

事実婚の旦那。

急一

あ、うん。

八重子

ま、わざわざ話すこともなくてことだらね。

急一

：うん。

井手

あの。

八重子

え。

井手

手を握ってもいいですか？

急一

え、ここで？

八重子

え？

井手

ダメですか？

八重子

いえ：ちよつとカサついていますけど。(恐る恐る出す)

井手

(握って) あ、ほんとですね。

八重子

(慌ててひっこめる)

井手

(自分から差し出す)

八重子

(恐る恐る)

井手

(ぎゅっ。)

八重子

！

井手

あの。

八重子

はい？

井手

よかつたら、映画でも。

八重子

あ……………はい。

急一

(心でガッツポーズ)

手をつないで歩いて行く2人。

お世辞にも美しいと言えない、中年体型の男女。

その様子が、急一の脳内には、古き善き映画のように映る。

■ピオランテ

急一 その日、八重子おばさんは遅くに帰って来ました。…遅かったね。

八重子 うん。

急一 何見たの？

八重子 え。

急一 あ、映画。

八重子 ゴジラ対ピオランテ。

急一 ゴジラ好きだっけ？

八重子 全然。

急一 だよね。…失敗です。チョイスミスです、井手さん。

でもその晩は……パソコンの音がしませんでした。しばらくラジオが流れて…八重子おばさんは十一時には寝てしまったようでした。僕はなんだかすごく嬉しくなってしまうて……もしもし。

千代子

(超低音) ……だれ。

急一 ……あ、寝てました？

千代子 ……うん。(超低音)

急一 すいません。

千代子 覚えといて。あたし10時には寝るの。

急一

その横にあのVシネがいるのかなと思うと…そのVシネは、隣で紫のソファとかでブランドー飲んでるのかと思うと…あや、絶対ちがうと思うけど。

千代子

まじで？ で、手くらい握ったかな。

急一 がっちり。

千代子 やったね、怪獣！

■送骨

井手の自宅兼事務所。机の上のダンボールを指して、井手。

井手 これ、ここに宅配で送ってくれる？ 送り状そこにあるから。

急一 はい。(書き始める) 品名は。

井手 お骨。

急一 は。

井手

お骨。

急一

あの：

井手

今担当してる人の実家が廃屋になってね、そしたらその中に。

急一

え。

井手

亡くなられたのは3年前らしいんだけどね、近所の人だーれも気付いてなかったんだって。

急一

これ、どなたなんですか。

井手

その、お客さんのおとうさん。

急一

おとうさん！

井手

でもそのお客さんも、おとうさん死んだこと知らなかったんだって。誰がお骨にしたのかもわかんないんだって。

急一

お葬式とか。

井手

やんないんだって。

急一

送骨。関東の方に3万円で葬儀・納骨をやってくれるお寺があるそうです。自分が死ぬときのことなんて何度も考えたことがあります。どうなったっていいとも思っていました。けど骨になって廃屋に3年「居た」、この見知らぬ人のことを勝手に想像したら、天国？ 極楽？ なんか寂しくないところで眠れますように、と祈ってしまいました。：家族って、何でしょうね。

井手

何だろうね！

急一

え。

井手

皆さんは好き勝手に、はずかしい、おろかしい借金や失踪を重ねますけど、それすべて整理するのは僕らですから！ 六法全書片手に女性週刊誌の世界に突入するわけですから！

急一

！

井手

：と、常々思っております。

急一

井手さん。

井手

何。

急一

かっこいいです。

井手

ありがとうございます！

急一

井手さんの仕事を手伝うのはおもしろかったです。土地の境界線を巡って何10年もケンカしている人たち、たった一人の遺産を巡って5人の奥さんが争ってる案件：

井手

あなたのもつれ、六法全書でほどきます！

急一

(見惚れる)

井手

(ポーズを取る…と、ゴキッ…) ……あっ……！

急一

ギックリ腰！ 僕はどうしていいかわからずSOSを出しました！

飛んで来る八重子。

八重子 急一、布団！

急一 あ、はい！

八重子 動かしますよ！ 息、止めないで！

井手 (リアクション)

急一 八重子お婆さんは見たことない顔で井手さんを看病しました。そして……

慣れないながら懸命に台所に立つ八重子。

急一 ……おかゆを、焦がしました。

井手 すごいですね。

八重子 え。

井手 おかゆを焦がすって、聞いたことないですよね。

急一 うるさい井手！ ズボン握ってろ！

井手 てか病気じゃないので、普通のごはん食べれるんですけどね。
八重子 (リアクション)

急一 それから3日間、八重子お婆さんは井手さんちに通いました。

かいがいしく家事をしている八重子。

急一 (千代子に電話) もしもし。

千代子 今、忙しいんだけど。

急一 忙しい。千代子お婆さんが、キャバ嬢の引き抜きに失敗した若い衆に説教しているところが浮かびました。あや、絶対違うと思うけど。

千代子 まじで？ 一気に進んだね。

急一 はい。

千代子 恋のすごろく、
見届けます！

井手宅・居間。井手・八重子。急一。
 (焦げたホットケーキ)を前に、3人。

井手 これ(ホットケーキ)ですか？
 八重子 ……の、つもりですけど。
 井手 (もんじゃ焼き)かと思いました！
 八重子 (リアクション)
 井手 あああいや、よく、火が通って。
 八重子 無理して召し上がらないで下さい。
 井手 食べます！ ……あ、苦い。
 八重子 (リアクション)
 井手 あ、八重さん。
 八重子 はい。
 井手 来週土曜日、お時間ありますか？
 八重子 え。
 井手 顧客の方からチケットを頂いて。
 急一 コンサートですか？
 井手 なんだっけ…(近くにあったカバンを探って)あ、これ。「ドキドキッ！
 素人
 だらけのカラオケ大会」。どうかな。

急一 ……ど、どうですかね。
 八重子 来週末は、業者が来るんで。
 井手 あ、片付けの。
 八重子 はい。
 井手 いやいよですね。
 八重子 はい。
 井手 寂しくなりますね。
 八重子 全然。
 井手 ?
 八重子 あの店には、あんまりいい思い出がなくて。あ、千代子は逆だと思いき
 けど。
 井手 そうなんですか？
 八重子 うち…レストランって言っても夜は常連さんの居酒屋みたいになっ
 て…そこで千代子が歌うんです。

八重子のまなざしから、当時の様子を想像しはじめる急一。

賑やかな店内。

常連客に囁かれて「当時の最新歌謡曲」を歌い踊る、こども時代の千代子。

八重子 歌も振付も、すうぐ覚えてしまうんです。お客さんも父親も大喜び。で、
 井手 ?

八重子 あたしも何か対抗したくて、100点のテスト持って店に行くんですけど、
井手 100点！
八重子 あたし、勉強だけは出来たんです。でも出すタイミングがなくて。
井手 ま、見せられてもですね。
八重子 …ですよね。

急一 井手！ズボン！（心の中でズボンの縫い目を握ってみせる）

八重子 それでも何かこつち見て欲しくて。バカですよ。昔つからそういうのが下手くそなんですよ。

井手 なんか焦げ臭くないですか？

八重子 あ、お鍋！

急一の頭の中の想像が続く。

店の真ん中で注目を浴びている姉。

居間のガラス戸の向こうで、店に降りて来れず立ち尽くす妹。

やがて「当時の最新歌謡曲」に合わせて、対照的な小学生2人が踊り始める。
たまらぬ思いでそれを眺める急一。

■カード

急一 ある晩、帰ったらおかあさんが居ました。

急一宅・居間。

八重子・よしえ。急一。

急一に気付き、土気色の苦笑いで会釈するよしえ。

八重子 きょう泊まらすけん。

急一 カードで買い物し過ぎたのが旦那さんにバレて、大喧嘩になったらしいです。

八重子 てか、何ば買うたと？

よしえ スープ。

八重子 スープ???

よしえ (嬉しそうに) うん。フカひれとかキャビアとか、いくつぱい種類のあつて。箱買い。

よしえ うん。

八重子 豪勢ね。

よしえ 今度持って来る！

八重子 要らん。
 よしえ あたしも要らん。
 八重子 は？
 よしえ ……なんかね、ネット見よると、わあ、これ運命！とか思うてしまうと。でもポチッとした後は…
 八重子 要らん、て？
 よしえ うん。
 急一 ……
 よしえ (ゆっくりと急一に向き直って) ……ごめんねえ。(土気色の笑顔)

急一 もともと痩せてるおかあさんが、もつと…ひからびたように見えました。僕は血縁、という認識が薄いです。
 薄情、と言ってもいいかもしれません。…ごめんね。

やせた母親の背中に、背を向ける急一。
 悶々のやり場なく、逡巡の後、千代子に電話。

急一 もしもし…
 千代子 (大声) 今、呑んでまーす！ あ、リョウちゃん、音、小さくしてえ！
 急一 市原隼人にそっくりなボーイさんがカラオケの音量を下げに走るのが見

えました。隣には竹内力。…絶対違うと思うけど。

千代子 (大声) なあぁにい？
 急一 別に。
 千代子 (大声) はあ？
 急一 (大声) べつに！
 千代子 声が聞きたかった？
 急一 ……
 千代子 (大声) 恋人か！ 八重ちゃんどう？
 急一 (大声) 元氣！
 千代子 (大声) あんたは？
 急一 (大声) 元氣！
 千代子 (大声) そ！ じゃ切るよ！ リョウちゃん、もういつきよ…(電話、切る)
 急一 ……

じんわりとこみあげる、こそばゆいような嬉しさ。

世間は引き続き椅子取りゲーム。
 いつもは取り残されたような焦りで眺めるその景色を、スキップするような気分で眺める急一。

立ち止まると急一宅・居間。
八重子が話しかけて来る。

八重子 ねえ、よしえさんに連絡つく？

急一 え？

八重子 電話のつながらんで。

急一 おかあさんがいなくなりました。千代子おばさんが、その日のうちに飛んで来ました。

千代子。井手。

井手 自己破産となると、貸したお金を回収するのは不可能に近いと思います。

千代子 まじで？

井手 そのための自己破産ですから。

千代子 そこを何とかすんのがあんたの仕事じゃないの？

井手 それは行政書士の仕事じゃないので。

千代子 (リアクション)

急一 ……すみません。

千代子

井手 あんたが謝んなくていいの。

千代子 あ、でもその方のご主人に、取り立ての申請をすることはできると思いま

井手 まじで？

千代子 はい。

井手 じゃすぐやって！

八重子 あ、はい、

皆 もうよかと。

急一 ?

八重子 貸したくて貸したっただけん、よかと。

沈黙。

急一 あの。

皆 ?

急一 もう少し、伸ばすとか。この家、壊すの。

井手 それはちよっと…

八重子 よかと。ほんと、構わんで。

八重子、自室に戻ろうと。

井手

あの！

八重子

?
よかつたらうちに来ませんか？

急一

井手さんはズボンの縫い目をぎゅっと握っていました。

井手

僕と暮らすことが、あなたにとって幸せかどうかもわかりません。でも、

八重子

……
お互いぎっくり腰になったとき、気付くくらいは出来るのかな……と思います。

井手

ありがとうございます。

八重子

……

井手

でも結構です。

八重子

……

井手

……

八重子

……あたし、きつと、しがみついてしまうので。それがわかってるし、絶対にそれをしたくないのでお断りします。

井手

僕……きつと気付かないんで。しがみつかれても、たぶん気付かないんで。

八重子

やめて下さい。

井手

……

八重子

少しでもあたしのことを思っただけなら……ほっといて下さい。

井手

僕では、ダメですか。(ズボンが攀れるくらい縫い目を握り締める)

八重子

好きですよ。

急一、その即答に驚いて八重子を見、どきまぎしながら井手に視線を移す。
井手は斜め下の床をみつめている。
紫色のメガネのつるが少し下にずり下がって、「コントに出てくるおじいさん」みたいに見える。

八重子

だけん迷惑掛けたくなかいです。自分のことは自分で何とかしたかです。

井手

……

八重子

あたし……

井手

……

八重子

あたし、できることなら死んだ後、火葬場まで歩いて行きたいくらいなんです！

井手

……

八重子

ぶははは！(床を見たまま爆笑する)

千代子

(すかさず井手を引っぱたく)

井手

(メガネが更にずり下がる)

八重子

……なんで、無理です。ごめんなさい。

井手

……

千代子

……

井手

……

八重子

……

井手

……

八重子

……

急一

鍾乳洞。

千代子
急一

急ちゃん。
？

千代子に促され、二人でその場を離れる急一。
急一の頭の中に、鍾乳洞の中に立ち尽くす井手と八重子が浮かぶ。

■業者

急一宅。

不用品撤収の日。

作業服の片付け業者、うやうやしく。八重子・千代子・急一。

業者①

皆様には思い入れのあるものばかりかと思えます。本日は心を込めて片付けさせて頂きます。

急一

片付け業者の人たちは、なんだかちよつとした儀式みたいに言いました。

業者②

思い出として取っておくもの、お焚き上げに回したいものなどございましたら、遠慮なくお申し付け下さい。

八重子

おたきあげ？

業者②

はい、こちらで誠心誠意心を込めて、神社で合同で。

業者①

そういうの無いんです。とつととお願ひします。
あ、わかりましたあ。(あっさり)

急一

そこからの業者さんは見事でした。ぎゅうぎゅうに詰め込まれた服や書類や電化製品を、

声 声

可燃、不燃、リサイクル！

可燃、不燃、リサイクル！

急一

呪文のように唱えながら、大きなトラックにぎゅうぎゅう詰めで帰って行きました。…からっぽになった薄暗い空き店舗は、ますます鍾乳洞のように見えました。

八重子

2トントラック35万。

千代子

え。

八重子

きょうの費用。

千代子

そんなもんか。

八重子

うん。

千代子

どこ行くの？

八重子

？

千代子

次。

鍾乳洞。

もう取り戻しようのないところまで生きてしまっている二人…に、どう対応していいかわからなくなる急一。痛ましさと嫌悪感の両方が渦巻いて、

急一 あのと。

二人 ?

急一 俺も要らんけん。

八重子 は。

急一 お金、要らんけん。八重子おばさんのよかごつして。

八重子 何それ。

急一 八重子おばさんの、よかごつ、

八重子 ちゃんともろて。迷惑だけん。

急一 ……

八重子 なーんしきらんくせおつて。勢いでそがんこつ。

急一 ……

八重子 みーんな要らんて言う。みーんなお金なくせに要らんていう。おもしろかねえ！ 呪われとつとかね、こんお金！

千代子 八重ちゃん！（激しく睨みつける）

八重子 なんね！（噛み付くように睨み返す）

急一の頭の中に「当時の最新歌謡曲」流れ始める。

常連客の拍手。父親の掛け声。

華やかに歌い踊る、子供時代の千代子。

妬みと憧れいっばいに睨みつける、同じく子ども時代の八重子。

ぐぐうぐつと時間の渦が巻き起こるように現在。

飲み込み続けた言葉を吐き出すように踊る八重子。

その甘えと痛みを痺れるほど感じながら、千代子。

頭を振ってその妄想をかき消そうとする急一。

いたたまれなくなつてその場を離れる。

■繁華街

急一 繁華街を歩く。クリスマスモード。キラッキラ！ まぶしい！ 電気遣

いすぎだぜ、繁華街！

全然お金がない状態で歩く繁華街はとても不思議です。こんだけ人がいるのに、こんだけ店があるのに、誰とも話せない。どこにも入れてもらえない。

手つなぐな、カップル！ やんのか？ 今からやんのか？

あ、よけられた！ あの女、今間違ひなく、俺をよけた！（自虐笑）

年末の繁華街。酔っ払ったように徘徊している急一。

急一

はい、お風呂入ってません！ もう何日目かもわかりません！
人が近づくと自然に離れる癖もつきました。帽子が不可欠。不潔ふかけ
つ。こうやって簡単にホームレスになれるんですかね。なれる？ なっ
ちゃう？

くそ、よけろよけろ！ ブスよけろ！

：見上げればソーブ街。ソーブビル。

あ、入ってった！ おっさん！ すけべ！ 変態！ エロクソ野郎！ 生
ゴミ人間！

げげげげげ

ままままま

ろろろ

がががががが

ごごごご

がががががががががががが

うるさい！ あたしや18だよ！

！

はああああつ！（猫のような怒気を吐く）

：ぎよつとして振り向くと、チラシヤステッカーがべたべた貼られた空き

急一

狂女
急一

酔客
狂女

キメえ！ くされまんこが！ 死ね！

てめえが死ね！ しね！ しね！（唾を吐きかけ続ける）

ビルの前で：幽霊みたいなおばあさんが酔っ払いに絡まれていました。

そのおばあさんは、地肌に見える薄い：綿菓子みたいな髪の毛を金色に染
めて、真つ青な：ボディコン？ そんな、身体にびったりのワンピースを
着ていました。そして、クレヨンで描いたような真つ赤な口紅。

凝視する急一。

目が合う。

あんた。

え。

口でしてやろか？

え。

千円でよかけん。

あの：

口でしてやるよ。キモチよかけ〜ん。（しゃしゃしゃ、と息を漏らして笑う）

そうしゃべる口の中には歯が3本しか見えませんでした。ドブみたいな
：すごい口臭がしました。

急一

狂女
急一
狂女
急一
狂女
急一
狂女

狂女

中を出してもよかとばい。ねえ…ねえ！（腕にしがみついて来る）

急

わあああ!! 僕はすがりついてくるおばあさんの枯れ枝みたいな腕を振りほどきました。

おばさんはギャツと声を挙げて大げさに転びました。

走る。

声 声 声

がががががが
げげげげげげ
ごごごごごごごご

はしる。はしる。はしる。

急

なんで生きてるんだろう。なんで生きてられるんだろう。

そして、あのおばあさんの骨は誰が拾うんだろう。

どーどーどーでもいい! もうどうっでもいい!

じゃパチンコ屋の住み込みは?

タバコが、

ホスト。

声 急 声

無理。

日雇い。

こえええよ。

じゃ、どうやって生きてくの?

わかんねえよ。

どこで寝るの?

わかんねえよ!

どうやって食べてくの?

わかんねえよ! ほんっともう、みんなどうやって生きてんだ? どうやって、どうやって生きてんだ??

どーでもいい。もうどうっでもいい!

と、携帯の着信音。

…はい。

もしもし。

…え。

もしもし。もしもし。

声 急 声 急

千代子

そんなもんよ。きつと。

急一

どうでもいいね。

千代子

どうでもいい。どーっでもいい。でも本人は一生懸命。

急一

……

千代子

あんたは？

急一

え。

千代子

生きがい。

急一

…童貞捨てたい。

千代子

どーっでもいい！

急一

でも本人は一生懸命。

千代子

ナンパしてくれば？ あの子は？（適当な女の子を指差す）

急一

怖そう。

千代子

怖そう？ 何が？

急一

何しゃべっても、笑ってくれん気がする。

千代子

じゃあの子は？

急一

あれはちよつと。

千代子

何。

急一

…でぶ。

千代子

ぜいたつつく！（帽子の頭を引っぱたく）

急一

何で。

千代子

え。

急一

何でAV？

千代子

…

急一

…深呼吸した。ズボンの縫い目をぎゅつと握った。ルンバにならないように。ひとも聞き漏らさないように。

千代子

話したじゃん。

急一

「豆まめパニック」。

千代子

そう。

急一

いや、そうじゃなくて、何で。

千代子

何で？

急一

何で、AV？

千代子

何かになりたかったの。

急一

え。

千代子

何にもなれてない時間が苦しすぎてさ、とつと何かになりたかったの。

沈黙。繁華街の音。

千代子

いつつ…（背中を撫でる）

急一

痛い？

千代子

ちよつと。

急一

（千代子の背中に回る）

千代子

お。（嬉しそうに姿勢を整える）

急一、揉む。もう何度も揉んだ背中。
揉むことに立ち上る「知ってる香り」。
と、突然、不安な懸念が浮かんで来る。

急一 ああ。
千代子 ん？
急一 …どつか悪いと？
千代子 わかんない。
急一 ？
千代子 ほんとわかんないの。来週また検査なの。
急一 え。
千代子 どーっでもいいけどね。…………ちよつと怖いね。

沈黙。

艶めいた唇を噛む千代子。

こみ上げる何かをぎゅっと閉じ込めているように見える。

千代子 ねえ。
急一 ？
千代子 ぎゅーっでしてくれる？
急一 ？？
千代子 熟女で練習する？

急一 本気でするけど、よか？
千代子 お！ じゃ童貞の本気見せてもらおうかな。
急一 …行くよ。
千代子 よし来い。
急一 ……行くよ。
千代子 よし来い！

逡巡する急一。

…の間を突いて千代子、急一を強く抱きしめる。

急一 ……！
千代子 ……あんたさ、あのニオイがする。
急一 え。
千代子 雨に濡れた犬。
急一 くせえ。
千代子 くせえ。(笑)

急一、抱きしめ返す。

何度も嗅いだ千代子の香りが、自分の身に移って来るのを感じる。

■Vシネふたたび

急一

翌日、またVシネの旦那さんが迎えに来ました。おばさんはまた抱きついてチューをしました。あのくちびるで。

Vシネの旦那さんに腕をからませ、帰って行く千代子。

ずっと見ていたような、石を投げつけたような背中。

数週間後・解体の日。

重機。

痛々しく、しかし豪快な音を立てて掻き壊されて行く家屋。

重子・井手・急一。

ごーん、と落雷のような音。思わず身をすくめる三人。

平静を取り戻すようにゆっくりと深呼吸して、八重子。

八重子

いろいろお世話になりました。

井手

あ、いえ、

八重子

もう来んで下さいね。

井手

え。

八重子

会いたくないんで。

井手

キビしいなあ(笑)

八重子

早く年寄りになりたい。

井手

え。

八重子

もう枯れ始めよるとに、半端に肉肉しか。見苦しかですよね。

井手

……

八重子

だけん、さっさ、年寄りになりたいです。

井手

なれますよ、すぐに。

八重子

！

井手

……あ、すいません！（ズボンの縫い目を握る）

急一

……

八重子

……あたし、やっぱりあなたが好きです。

井手

え。

八重子

だけん、もう来んで下さいね。

井手

わかりました。

八重子

……

井手

あの……

八重子

はい？

井手

こういうときは、抱きしめたほうがいいんでしょうか？

八重子

……結構です。

井手

あ、すいません。

深々とお辞儀をして帰って行く井手。
振り返りそうでも振り返らない、とぼとぼとした背中をいつまでも見送る急一。

■日々

急一

もしかしたらまた井手さんは普通にうちに来たりするのかな、と思いましたが。もしかしたらおかあさんすらやって来るのかな、とも思いました。「うち」がなくなったのにそんなこと考えるのはおかしいかもしれませんが、なんですか、考えるようになりました。

僕はあるの、左隣にパチンコ雑誌が詰まれてて、右隣からはお年寄りの咳払いが聞こえるあのアパートに住んでいます。

大学は…：休学しました。休学するためのお金は…：10万円でした。

あれからいちどだけ、おばさんの携帯に電話しました。

お掛けになった電話番号はただいま…

番号をお確かめの上、

つーつーつー

つーつーつーつーつー

つーつーつー

声 声 声 声 声

急一

そしたらなんだか泣けて来ました。おとうさんの葬式にも泣かなかったのに、泣けて泣けて仕方ありませんでした。…：ま、どーっつでもいいんですけどね！

更地になった「もと自宅」。

掘り返され、ほぐされ、「土」になり、そこに次の時間が降り注ぎ始める。

優
秀
賞

終わってないし

作・南出謙吾

登場人物

陽一（ヨウイチ） 27歳
洋子（ヨウコ） 31歳
伸治（シンジ） 27歳
麻子（アサコ） 20歳

【1】

マンションのリビング。整理整頓が行き届いていて、綺麗にしてある、男の部屋。
キッチンや寝室は別にあるようだ。一人暮らしにしては少し贅沢な部屋。
テーブルに男（陽一）がひとり座って、なにかの用紙に立ち向かっている。真剣だ。

……特技。

必死に考える。

……特技。技。

あちこち眺めたり、自分の手を見たりする。

……無し。

と、書く真似をして、やめる。缶コーヒーを一口飲む。携帯を触りだす。缶コーヒ
ーを倒してしまう。

まじか。

慌ててキッチン(舞台外)へ。キッチンペーパーを数枚持って戻って来る。にわか
に慌ただしく、こぼれたコーヒーをしっかりと拭き取る。拭き取り、目視し、よしと
する。ふき取ったキッチンペーパーをごみ箱へ。不燃ごみと一般ごみのゴミ箱が
あり、ちゃんと確認して、一般ごみの方に捨てる。一連の動作は習慣化されたもの
ではなく、意識してそうしているように見える。テーブルに戻り残った缶コーヒ
ーを飲み干す。空缶を、ちゃんとそれ用のごみ箱に捨てる。やはりよくトレーニ
ングされた几帳面さだ。後処理を終えると、ソファへ。ソファには、既にタオルケ
ットに包まって女(洋子)が眠っている。無理やり潜り込む。洋子は起きてしまう。

洋子
陽一
洋子

臭い。
ん。
臭いって。

陽一、ソファから追い出される。

洋子
陽一
洋子
陽一
洋子
陽一
洋子

コーヒー、飲んだでしょ。
飲んだ。
嫌だっけってんじやん。
ごめん。
できたの、履歴書。
まだ。
早く。

机に向かう。

陽一
洋子
陽一
洋子
陽一
洋子

特技って何？
そろばんとか、書道とか。
級のあるやつ？
何かないの？
ないよ。級ないと駄目？
わかりやすすくないとデキル人かわかんないでしょ。

携帯を手に取り、画面を見せる。

陽一
洋子
陽一
洋子
陽一
洋子
陽一
洋子
陽一
洋子

はやくも村長。
ふざけてんの。
マネーシメントのセンスあるよ俺。これわりとリアルなんだよ。
ぜんっぜんすごさ伝わんない。
人口も千人超えたし。
(髪やタオルケットを整えながら) どうでもいい。
すごくない、このゲームを俺の同級生がつくったって、なあ。
何回も何回も聞いた。
貴重な自慢話なのに。
一回で充分。

陽一 ぜんぜん覚えてないじゃん。
洋子 そんなとこまでつつこんでこないって。だいたいそこ全員読書だし。
陽一 そうか？

洋子 バイト雇うのに趣味関係ないじゃん？ 余ったスペース埋めてるだけの
陽一 コーナーなんだから。変わったの書いたら、逆にイタイし。
陽一 イタイって？

陽一 宗教とか、デモとかしてそうじゃない？
陽一 そうか。

洋子 いいから、大人しく右へならえしときなさいって。

陽一 懐かしいなそれ。右へく倣え！

洋子 右向け右でしょ。

陽一 前へ倣えか。

洋子 あ、そっち。

陽一 なおれ！ 気をつけーって、やったよなあ。

洋子 陽一にも素直にそんなことしてた頃があっただ。

陽一 小さく前へ倣え、つてもあつたよな。あれなに。

洋子 ちゃんと世の中に適応できる子を育んでるの。陽一みたいにならないよ
陽一 うに。

陽一 俺、すげー前へ倣えしてたけど。

洋子 いいから早く書いて。

陽一、言われるがまま、「読書」と書く。

陽一 志望の動機。
洋子 なに？

陽一 ……金がある。借金がある。

洋子 ちゃんと。

陽一 人と話をするのが好きなので、お客様センターの仕事に興味があるので。
洋子 いいじゃん。

陽一 だろ。空気読むことだけはちゃんと仕込まれてきたんだから。

陽一、志望の動機を書き、全体を眺める。

陽一 ……うそばっか。

洋子、陽一から履歴書を取る。

洋子 もつたいない。

陽一 ん。

洋子 けっこういいとこに勤めてたんじゃん。

陽一 過去の栄光だよ。

洋子 なんてやめたの。

陽一 いいじゃん。

洋子 聞かれるよ。面接で。

陽一 年収が間違ってたって。
洋子 は？

陽一 ネットでさ、「あなたの年収間違ってます。」って。あるじゃん。
洋子 しらない。

陽一 あるんだって。それにひっかかったっていうか。
洋子 騙されたってこと。

陽一 騙されたってのはちがうけど。自己責任。
洋子 話す気ないならいい。

陽一 夢感じんじゃん。そりゃそうかもなあって思うし。それがひでー会社で
さ。
洋子 きたない字。

陽一 聞く気あるの。
洋子 ん。

陽一 つまんねーだろーなー。お客様センターなんて。
洋子 しょうがないじゃん。家賃もスマホも、あるんだし。

陽一 要る金が追いかけてくるのから、逃げてるだけみたい。
洋子 家賃もつと安いところに引っ越したら。

陽一 それも金かかんじゃん。
洋子 何か月かですぐ取り戻せるって。

陽一 そこまで失いたくない。
洋子 はあ？ 見栄？

陽一 なあ、健康で文化的な最低限度の生活にスマホはいんのかな。

洋子 引っ越し嫌なら死ぬしかないね。

陽一 極端すぎだし。
洋子 極端じゃない。

陽一 いいんだって。
洋子 知ってる。人間金のせいで、オレオレ詐欺やったり、石油で戦争したりす
るんだよ。

陽一 しねーし。

陽一 洋子、履歴書をテーブルにちゃんと置く。
オツケー？

洋子 洋子、履歴書を拝んで。
陽一 うかりますように。
洋子 (真似て) うかりますように。

陽一 他人事？
洋子 切実。

陽一 うかったのわかったら、メールして。
洋子 どうして。

陽一 責任感じるし。路頭に迷ったりしたら。
洋子 はあ？

陽一 はあ？

洋子、姿勢を正す。

洋子 ……元気でね。
陽一 なんだよ、あらたまって。
洋子 ちよつとくらい、あらたまってもいいじゃん。2年もつきあったんだし。
陽一 (突然、声を荒げる) そんな来週でいいだろ。
洋子 (驚くが、落ち着いて) おおきい声ださないで。わかったから。
陽一 ……住むところは。決まったの。
洋子 決まった。
陽一 どこ。
洋子 友達の家。
陽一 え、また居候。
洋子 うん。
陽一 え、男？
洋子 男。
陽一 ……かっこいいの。
洋子 まあまあ。普通の人。
陽一 (鼻で笑う) 普通って。
洋子 仕事してるし。普通に会社で。
陽一 へえ。
洋子 人生、簡単に脱落するんだよ。

陽一 既にしてるし。
洋子 エリートぶって。
陽一 ぶってねえし。
洋子 もうちよつとちゃんとした人だと思ったのに。
陽一 それはごめん、ちよつと騙した。

洋子、再び机の履歴書を手に取り、見る。
陽一 どうして、何回も見るの。
洋子 どんな子だったんだろって。
陽一 そんなん、履歴書みてもわかんないじゃん。

洋子は履歴書で陽一の歴史を追っている。
洋子 ね、ここ、汚れてない。

陽一、洋子の足を持つ。
洋子 ゴムないよ。
陽一 ん。
洋子 するなら買ってきて。
陽一 大丈夫。

と言うなり、洋子に抱きつく。

洋子 いや。
陽一 なんで。
洋子 ゴム買ってきてよ。
陽一 金ないもん。
洋子 じゃ、だめ。
陽一 なんでだよ。いいじゃん。ゴムくらい。
洋子 いるでしょゴム。
陽一 なんでゴムもねえんだよ。

洋子、陽一を振りほどく。

そして、その勢いそのまま立ち上がり、カバンを持つ。

陽一 なに。
洋子 買ってくる。ゴムと、履歴書。
陽一 履歴書。
洋子 コーヒーこぼしたでしょ。
陽一 ちよっとだけ。
洋子 書き直し。

陽一、面倒くささを前面に表し、机に突っ伏す。

洋子 なんかいる。
陽一 いらない。
洋子 ちゃんとしてよ。出て行ったらほんと他人なんだから。
陽一 は？ 今？ なに言ってるの。
洋子 だから来週だって。
陽一 ああ。

洋子、出て行く。

あ、コーヒー。

洋子に頼もうにも、もう居ない。

ま、いつか。

履歴書を雑に置く。

陽一 ……ゴムと、履歴書を買う。女子。

にやけてくる。起き上がる。

陽一 いいなあ。すげーポジティブ。

床に横になる。タオルケットを巻きつける。
ミノムシになる。うごめく。

陽一 受かりてえええええ。

【2】

そのまま数日が経過している。陽一は眠っているようだ。洋子ではなく、コンビニの袋を持った、男（伸治）が、部屋に入ってくる。コンビニの袋から缶コーヒーを取り出しテーブルに置く。陽一に近づく。眠っていることに呆れる。おもむろに陽一の足を取る。そして突然プロレス技をかける。

陽一 いたいたいたいたいたい。

伸治、陽一を解放する。

陽一 なにすんだよ。

伸治 陽一
寝んなよ。この短時間に
コーヒーは。

伸治、首でテーブルを指す。

陽一 ありがとう。
伸治 ぜってー、体に悪いそれ。
陽一 いいじゃん。

陽一、財布を取りに行こうとする。

伸治 陽一
おごるよそんなくらい。
陽一 まじで。

陽一、缶コーヒーを飲む。伸治も、コンビニの袋からもう一本の缶コーヒーを取り出し、じっと見る。

陽一 お前も飲むんだ。
伸治 やめてただけだな。
陽一 コーヒー？
伸治 でもいいや。

伸治、思い切って、空けて飲む。

伸治　うまい。
陽一　なんだそれ。
伸治　飯は？
陽一　減った？
伸治　減らない？
陽一　俺燃費いいから。ハイブリッド車。
伸治　何もしてないだけじゃん。
陽一　余計な二酸化炭素を排出するだけだし。エコエコ。
伸治　何があったか知らないけど、同窓会ぐらい顔だせよ。小さいゼミなんだし。
陽一　会いたくねえし。
伸治　お前だけだよ。音信不通なの。
陽一　お前は、ほら、あっち側の人間だから。
伸治　あっち側？
陽一　ちゃんとできてる方。

伸治、呆れる。

陽一、携帯ゲームを始める。

伸治　仕事は。何か見つけたの？
陽一　お客様センター。

伸治　へえ。
陽一　きついよー。切ったら取る、切ったら取る。プロイラーみたい。
伸治　そんなもんだろ、仕事ってのは。
陽一　どうせならもつと人の役に立ちてえなあ。

伸治、鼻で笑う。

陽一　プロイラーの方が役に立つな。食べられるし。
伸治　いえてるな。

陽一、ゲームをやめる。

陽一　あああ、プロイラーになりてえ。
伸治　働いてんならいいけど。
陽一　お前は？
伸治　なに。仕事？
陽一　うん。
伸治　営業。通信系。
陽一　つうしん？
伸治　光ファイバー売ってんだ。
陽一　かっこいいな。
伸治　そうでもないよ。

陽一 買ったらどうなるの、それ。
伸治 買ったらって言うか、ま、インターネットが早くなる。
陽一 パソコンないと駄目なやつ？

伸治 一応な。
陽一 速いとどうなるの？

伸治 どうなるって……うれしくなるんじゃないかね。使ってる人は。
陽一 へえ、すげえな。

伸治 3%位の情報で感心されると、申し訳ない気分になる。
陽一 知ってるけどな。

伸治 馬鹿にしてんのか。
陽一 偉いな。伸治は。

伸治 バイトでもな、続けたほうがいいよ。お前んところはよく知らないけど、
陽一 何やっただってほしい一緒だよ。絶対やめんな。
伸治 だからそんなの知ってるし。

伸治、立ち上がる。

陽一 なに。

伸治 便所。

陽一 そ。

伸治、いなくなる。

陽一、コーヒーを飲む。

陽一 世の中は、どんどん進歩していくねえ。

携帯を眺める。

陽一 ……だいたいセンタースマホ持ち込みないし。それが致命的なんだよ。

ゲームを始める。

陽一 ……金取ることばっか。

伸治が戻ってくる。手に缶酎ハイを持って、うれしそうにしている。

伸治 なあ、なにこれ。

陽一 何って。酒。

伸治 ピーチ。

陽一 うん。

伸治 彼女。

陽一 そんなのよく見つけるよな。

伸治 冷蔵庫の中でひと際輝いてた。

陽一 勝手に開けんなよ。
伸治 いるの。
陽一 いるよ。
伸治 優しいな。こんな奴に。
陽一 うん、優しい。
伸治 何歳。
陽一 まず歳か。
伸治 いいじゃん別に。
陽一 よつつ上。31。
伸治 へえ。なんかいいな。かわいい？
陽一 即、ビジュアル。
伸治 いちいちうつつさいな。
陽一 かわいいよ。
伸治 まじで。自分で言う。名前は。
陽一 洋子。
伸治 (馬鹿にしたように笑う) お笑いみたいだな。陽一&洋子。
陽一 ……(少し落ち込む) 俺も思った。
伸治 何してる人。
陽一 不動産屋の事務かなんかだよ。たぶん。
伸治 たぶんって。
陽一 最近、会ってないし。
伸治 あそう。

陽一 一ヶ月くらい。
伸治 一ヶ月!? 長くない。
陽一 長いよ。
伸治 どうして。
陽一 出てったからだよ。
伸治 は? いつ。
陽一 一ヶ月前だろ。そりゃ。
伸治 今は何? その子は?
陽一 知らない。男の家にいるんじゃない。男の家に行くって言ってたから。
伸治 男って?
陽一 普通の人。普通に働いている。……まあまあかっこいい。
伸治 いやいや、彼氏とか?
陽一 知らない。そこまで突っ込んだことは、話してないし。
伸治 突っ込めよそこは。
陽一 まあでも……いや。
伸治 それって終わってるってこと、だよな。
陽一 終わってねえし。俺の中では。
伸治 いやいやいやいや。
陽一 まじで。
伸治 次いこ、次。
陽一 いいよ、俺、洋子としか付きあったことないし、こえーよ、他の女。

陽一、携帯の画面を見せる。

陽一 工場とか、家とか。畑とか。
伸治 うん。

陽一 ダムも作った。凄いだろ。

伸治 悪い、凄いかはわからん。

陽一 今、町長。

伸治 微妙に偉いな。

陽一 もうすぐ市長。

伸治 最後どうなるの。

陽一 さあ。今んとこ、終わりは見えないな。無いんじゃないか、そういうのは。

伸治 終わんないの。

陽一 見てみ。こうやって、ここに、コンビニ設置して。

伸治 うん。

陽一 しばらく待つと、出来る。

伸治 ……で。

陽一 できると、収入はいるから、また、何か作れる。

伸治 いつできるの、コンビニ。

陽一 明日。

伸治 なげー。

陽一 ここがな、ポイントで。スマホでほんとの金払うと、すぐ完成するんだけど。

伸治 そこで儲けてるんだ。
陽一 そうじゃね。だから俺は待つ。金払うと他に色々できるんだろうけど、払

伸治 わなくても、まあ、地味にこつこつとやればできる。
陽一 ふうん。

伸治 だから、ここまでくるのに、すげー苦労した。

陽一 びっくりする位無駄な苦労だな。

伸治 儲からん客だよ。

陽一 自慢気に言うことか。

伸治 あつたりまえじゃん。

陽一 いくらかかるの。コンビニ完成させるのに。

伸治 10円。

陽一 10円？

伸治 なに。

陽一 たったそんだけ。

伸治 でもな、これに金はらったら人間終わりだと思って。我慢してんだ。

陽一 あそう。10円。

伸治 建物によって違うけど、コンビニは10円。

陽一 ウンコに10円。

伸治 ま、そういうことだな。

陽一 我慢するんだ。

伸治 それに、こうやって広告クリックすると、少し完成が早まる。

陽一 ……出してやる。

陽一　　いいよ。
伸治　　いい！　出す。出させろ。10円。
陽一　　いいつて。金がないとかそういう我慢じゃねえし。
伸治　　無理。無理無理。
陽一　　なんなんだよ。

伸治、10円を財布から取り出して、テーブルに置く。
伸治、10円払え、コンビニ、おごるから。
陽一　　ほんといいんだつて。

伸治、陽一に掴みかかって。
伸治　　お前が、ウソコの10円で一日待ってる姿が耐えられないんだよ！
陽一　　考えすぎだよ。ずっと待ってるわけじゃねーし。
伸治　　いいから早くしろつて。
陽一　　わかったわかった。

陽一、携帯を操作して、コンビニを完成させる。
伸治　　なんかすげー抵抗あるんだけど。
陽一　　はやく。

陽一　　はい。できた。
伸治　　……どれ。
陽一　　これ。

携帯画面に表示される村の中にある1軒のコンビニは、とても小さい。顔に画面を近づけてじっくり見る。

伸治　　……なるほど。
陽一　　見た？
伸治　　うん……で。
陽一　　もう、完成。収入が入る。
伸治　　いつ。
陽一　　明日。
伸治　　あそう。
陽一　　……もう10円出せば、すぐだけどな。

伸治、突然陽一の携帯を奪い、捨てる。
伸治　　ちょおい、なにすんだよ。

陽一、慌てて拾いに行く。

伸治 画面われたらどうすんだよ。
陽一 なんだそれ。
伸治 金なんてこんなもんだよ。明日まで待って完成させるから、コンビニが愛しくなるんだって。
陽一 愛しくなるの。
伸治 我慢すれば、なる。
陽一

伸治、ソファに横になる。

伸治 なんか、馬鹿らしくなるな。そんなんで儲けやがって。社長て。
陽一 まあいいじゃん。
伸治 やめろ、そんなん。
陽一 うっざいなあ。ほっとけ。

伸治、静かになる。

陽一 寝たの?!
伸治 そんな一瞬で寝るか。
陽一 びっくりした。
伸治 ……変わらんのかなあ。
陽一 なに。

伸治 なんていうの、商売の、尊さ?
洋一 なんだそりゃ。
伸治 訪販なんて人間扱いされねえし。人間じゃねえけど嘘ばっかついてるし。ほぼ詐欺だし。
陽一 そうなんだ。
伸治 そ。それが俺の仕事。
陽一 ご苦労が耐えませんな。
伸治 ジャガイモ栽培してた方が何倍も感謝されるわ、世の中に。
陽一 それいうなら、プロイラーの方がうまいな。
伸治 見せて。
陽一 投げんなよ。

陽一、伸治に携帯を渡す。

伸治、画面を見る。ある建築物を指差して。

伸治 これはなに。
陽一 打ちっぱなし。ゴルフの。
伸治 そんなのまであるんだ。
陽一 普通の会社員に娯楽を提供してやろうかと思って。
伸治 なに様だよ。
陽一 金巻き上げるんだよ。
伸治 女取られたからか。究極に空しい奴だな。

陽一 　　そんなんとちがうし。
伸治 　　まんまだろ。
陽一 　　その大通りにあるじゃん。打ちつばなし。
伸治 　　ああ、あるな。
陽一 　　だから。
伸治 　　よくわからん。その理屈。
陽一 　　再現するんだ。この町。
伸治 　　へえ。ご苦労さん。

伸治、陽一に携帯を返す。

陽一 　　こないださ、その前通ったときにな。
伸治 　　ん。
陽一 　　(画面を指して) このゴルフ場。
伸治 　　ああ。
陽一 　　三階建てのゴルフの練習場が全部埋まって。全部の巣箱に鳥いるみた
伸治 　　いな。
陽一 　　世の中の奴は金あるんだな。
伸治 　　そこから何球も飛んでくるんだ。球が。カン、カカン、カン。て。満席だ
陽一 　　からひっきりなし。銃弾雨風みたいな。
伸治 　　みんなゴルフ巧くなりたいたんだな。
陽一 　　血の気の多い町だなあと思って。

伸治 　　元気があってよろしい。
陽一 　　イラつとしない？　なんか。
伸治 　　巧くなりたいたいじゃん。ゴルフ。かつこいいじゃん。
陽一 　　そうか？

伸治、何かを思いつき、座る。

伸治 　　そうだ。
陽一 　　ん。
伸治 　　今度、連れてきてやる。女の子。
陽一 　　は？
伸治 　　友達で、いい子いるんだよ。ネットで知りあったばっかなんだんけど。
陽一 　　すげーノリいいし。言ったら来るよ。
伸治 　　ええ？
陽一 　　もしかしてすげーいや？
伸治 　　すげーいやとかじゃねーけど。
陽一 　　なら決まり。
伸治 　　唐突だなあ、なんか。
陽一 　　そういうの、全然平気な子だし。
伸治 　　でもなあ。

伸治、缶酎ハイの蓋を開ける。飲みだす。

陽一

あ。

伸治、そのまま、ぐいぐい飲む。

陽一

お前、ちよつやめろ。

陽一、伸治から缶酎ハイを取り戻そうとする。

伸治、機敏にかわそうとするが、取り戻される。

陽一

やっていいことと悪いことあるだろ！

伸治

そんなに、怒んなくて。冗談じゃん。

陽一

缶コーヒー飲んだだろ。

伸治

飲んだよ。

陽一

飲んだ口で飲むな。

伸治

意味わかんねえし。

陽一

洋子、缶コーヒー滅茶苦茶嫌いなんだよ。

伸治

あ、そう。

陽一

そう。

伸治

でも、いないんだろ、もう。

陽一

いないよ。

伸治

忘れろって。

陽一、部屋を出ていこうとする。

伸治

どこいくんだよ。

陽一

冷蔵庫に戻しとく。

伸治

はあ？ 飲みさしだろ。

出て行く。

伸治

まじか、あいつ。

伸治、缶コーヒーを飲む。ちゃんと啜って、空いた缶をゴミ箱に投げる。外れる。

陽一が戻ってくる。

陽一

かわいいの。

伸治

あん？

陽一

その子。

伸治

……結構かわいい。

陽一

……へえ。

陽一、ゆつくりと、うれしい顔になる。

突然、ラジカセからがさつなレゲエ調の音楽が大きな音量で流れ始める。明転。麻子が駆け込んでくる。大きなコンビニの袋いっぱい酒やスナック菓子を開け、家飲みパーティーが始まる。麻子はものすごい勢いで話し始める。

麻子 並ぶ場所がちよつとずれてただけ。たった2メートル位。
伸治 うっわー。かわいいそ。
麻子 ほんとは一番なのに。
伸治 でも、それって、何人か並んだとき、気づかない？
麻子 ちがうんだって。二番目に来たウザそうな子らのグループが私の後ろじやなくて、横に陣取って。
伸治 え、まじで。せこー。
麻子 そしたら次から次と、そっちに並んで。あつちは、50人位になったのに、こっちはひとり。
伸治 ひとり？！
麻子 完全に多勢に無勢な感じじゃん。でも、事実が私が一番のり。でしょ。
伸治 間違いない。
麻子 10時になって開店したから、当然って感じで入ろうとしたら、店員に止められて。あつちの後ろ並んでくださいって。はあつて感じ。
伸治 ひでーな。

麻子 私一番ですって、訴えても、聞いてくれないし。証人いっぱいいるはずなのに、誰も何も言わないし。
伸治 ええ！

麻子 ひとり10番目位にきた男の人が、「たしかに、ずっといたけど並んでいるとは言えないなあ」みたいなことを、言い出して。お前は何様で何時からいたんだよって感じじゃん。私は朝4時ですけど何かって感じじゃん。なにこの空気読めて無い感。意味わかんないし。

伸治 ほんとだよな。
麻子 結局、イタイ奴って思われながら、屈辱的に後ろに並んで。でも、ぎりぎりで買えなくて。
伸治 うっわー。
麻子 ありえないでしょ。

伸治 でも、もうちよつとだけ、早めに折れてたら、買えたんだよね。
麻子 ……え、折れる必要なくない？
伸治 ……ないない。

麻子 なにが真実かでしょ大事なものは。50人がかりだからって、関係ないじゃん。
伸治 うんうん。ないよな。
陽一 なあ？

伸治 なあって。
陽一 え、あうん。
伸治 ごめんね、こいつ、ほんと人見知りなんだよ。
麻子 あ、私も。

伸治 うっそ。
麻子 ほんと。
伸治 見えない。
麻子 でも、ほんと。
伸治 へへ。
麻子 あ、信じてないでしょ。
伸治 信じる。
麻子 ありがとう。
伸治 それに。ここだけの話、あいつ緊張してんだよ。まだ童貞だからさ。
陽一 ちがうって！

声は思いのほか大きかった。

伸治 ……そんなにムキになんなよ。ほんとにそうみたいになるじゃん。
麻子 えーそうなんですかあ。
陽一 ちがうよ。
麻子 ほんととは。
伸治 どっちだと思う。
麻子 童貞じゃない。
伸治 露骨に言うなあ。
麻子 いいじゃん別に。
伸治 正解。な。

陽一 うん。
麻子 やったー。
伸治 おめでとー。すげーノリいいじゃん。
麻子 だってせつかくだし楽しまないと。
伸治 あ、いいこと言うなあ。な。

陽一は携帯ゲームを始めている。

伸治 おい、陽一、何やってるんだよ。
陽一 ゲーム。
伸治 おまえなあ。
麻子 ちよつとだけ。
伸治 ちよつとだけって。
麻子 なにやってるんですか。
伸治 超くだらんやつ。人間腐ってるよこいつ。

麻子、ゲームを覗きに来て、陽一はその距離に少し戸惑う。

麻子 あ！ これ、私もやってる。
伸治 え？
陽一 ほんとに。
麻子 うん。

麻子、携帯を取りに行く。

伸治 麻子ちゃんもやってるの。
麻子 うん。結構はまっている。
伸治 流行ってんだね。

麻子、陽一に画面を見せる。

麻子 ほら。すごいでしょ。
陽一 え、なにこれ。
麻子 都知事。
陽一 都知事!?
麻子 陽一君は。
陽一 まだ、もうすぐ市長。
麻子 ああああああ。でも、その頃って結構盛り上がりますよね。
陽一 火力発電。
麻子 都知事クラスになると、水力じゃぜんぜんおいつかないですよ。
陽一 公害大丈夫？ 人減らない？
麻子 それなりにあるけど、公園いっぱいつくれば、そんなに減りませんよ。発電するから、減る以上に集まってくるし。
陽一 へえ。

麻子 見せて。

麻子、陽一の町を見る。

麻子 あ。これって。もしかしてこの辺り？
陽一 うん、再現してみてるんだ。
麻子 やるやる。私も最初、自分の住んでるとこみたいにしたし。
陽一 やるよね。それがこないだ、すごいんだって。
麻子 なに。
陽一 これでコンビニつくったら、ほんとに同じ所に来月オープンすることにな
つて。あれ、あそこ。

陽一、窓の外のコンビニ予定地を指し示す。

麻子、見に行く。

伸治 偶然だろ。馬鹿じゃね。
麻子 あるある。
伸治 あるよねー。
麻子 私も再現してて。スペースたりなくなつたから、近所の駄菓子屋つぶした
ら。なんと、一カ月位たってほんとにつぶれたの。リアル駄菓子屋。
伸治 うそお、こえー。

麻子 私のせいみたいだに思っちゃって。駄菓子屋のばあちゃんにほんと悪いな
って思った。
伸治 そりゃそう思うと思う。
麻子 なんかそういうのあるよね、これ。
陽一 絶対ある。
麻子 そうだ。プレゼントしましょか。火力発電所。
陽一 え、いいの。
麻子 いいですよ。町友（マチトモ）になってください。
陽一 もちろん。
麻子 ちょっと待って。送るから。

麻子、携帯を操作している。

陽一も、携帯を操作している。

伸治はつまらなさそうにしている。

麻子 送った。海岸の辺り見て。
陽一 ……ほんとだ。
麻子 でも、建築に一ヶ月位かかるから。
陽一 そんなにかかるの？
麻子 結構レベル高いインフラだし。でも、課金千円かかってよければ、3日に
短縮できますよ。
陽一 ……千円？

麻子 あ、短縮してから送りますね。
陽一 え？ え？ それって。
麻子 いいですよ。おごります。町友の記念に。
陽一 いいよそんなの。
麻子 大丈夫、お金ありますから。
陽一 え？ いや、だからって。
麻子 宝くじ当たって、ゆとりあるんです。
伸治 へえーいくら。
麻子 去年だけどね、500万。
伸治 500万！
麻子 すごいでしょ。はい、送りました。短縮済みの火力。3日で完成しますよ。
陽一 ……ありがと。
麻子 あと、国立公園もひとつ送るとききますね。火力だけだと公害で結構人死ぬし。
陽一 え。
麻子 気にしない気にしない。
陽一 あの、課金の短縮はいいから。
麻子 火力の完成に間に合いませんよ。
陽一 自分でやるから。
麻子 そうなんですか。
陽一 いくら。
麻子 500円。
陽一 ……うん。

麻子と陽一、携帯を操作している。

麻子 町友も申請しましたから承認だけ、しておいてください。
陽一 うん。
麻子 ちゃんと遊びに来てくださいね。
陽一 絶対行く。

麻子、陽一の画面を覗く。

麻子 町長で火力つくるなんてすごいね。一気に発展しますよ。
陽一 へえ、楽しみ。
麻子 ほんとにリアル火力がきたらすごいね。
陽一 さすがにないでしょ。ははは。

取り残され気味の伸治、割り込んでくる。

伸治 そのゲーム、俺らの同級生が作ったんだよ。な。
麻子 ほんとに？
陽一 うん。
伸治 まじで。社長。
麻子 すっごい。じゃ神様じゃん。

伸治 同じゼミで。冴えない奴だったけど。人間わかんないね。
麻子 伸治君はやらないの。
伸治 いい。
麻子 おもしろいのに。町友んなろ。
伸治 絶対やんねー。
麻子 頑固だなあ。
伸治 それにしても、宝くじ500万って、いいな。
麻子 たぶん神様がね、損害賠償を払ってくれたんだと思う。
伸治 なに損害賠償って。
麻子 人生波乱万丈だったから。
伸治 へえ。
麻子 ……気になる？
伸治 気になる気になる。
麻子 じゃあ、麻子の人生三大事件！ の時間でーす。
伸治 いえーい。

麻子、拍手をする。伸治、のっかる。

伸治 いいの。なんかすげー楽しみ。
麻子 まずね、じゃ3位から。
伸治 うん。
麻子 なんだろなー。

伸治 え、なにそれ。わかんないの。
麻子 すっごいあって。
伸治 すっごいあるの。
麻子 すっごいある。はい。3位。
伸治 (盛り上げる) 3位〜!
麻子 高校の時なんだけど。なっかなか友達できなくて。
伸治 見えない。
麻子 今はね。でも、そういう時期ってあるでしょ。
伸治 (軽い) あるある〜。
麻子 もう! 結構深刻だったんだから。
伸治 あ、ごめん。
麻子 親心配させちゃいけないし、自分ちに友達装って、「アサコちゃんいる〜?」って電話したりしなきゃいけないし、自分宛の年賀状大量に偽造しまくったこともあるし。
伸治 そんなことまで。
陽一 わかる!
伸治 お前も?
麻子 ね。やるよねえー。

麻子の距離感に、やはり陽一は戸惑ってしまう。

……うん。

麻子 でもバレて。親超泣いて。こっちが泣きたいのに。
伸治 へえ。

でも、やっと一人友達できて。ただ、そういう時期にできる友達って、あったり前かもしれないけど、ちょっとっていうか、けっこう変な子で。だから、ガンガンいじめとかあって。でも、高校時代は二人でなんとか乗り切ったの。だからもうほんと親友で超マブダチみたいで。なのに、卒業して少ししたら、自殺して死んだ。

……え! え、その子が。
うん。

……で。
それだけ。それだけってのもあれだけど。
そう。

ま、これが見たい、100万位の価値かな。
なに。

伸治 神様への請求額的に。損害賠償?

伸治 あああああああ。

麻子 で、2位が。

伸治 あ、2位ね。陽一、2位だって。

陽一 うん、2位ね。

伸治 これはけっこう最近、去年とかじゃないけど、彼氏ってゆうか、男の人に、なんか、だまされたっぽい感じになって。
うわ、それ系くる。

麻子 どんどんいくよお。
伸治 で、で。
麻子 で、超色々あって、その人とは、なんとか別れたんだけど、百万とか
伸治 じゃないけど、何十万か借金みたいなのできて。
麻子 まじで?!
伸治 当然ヤバイ系のバイトとかしなきゃいけなくなって。
麻子 ヤバイ系って。
伸治 そんなの、内緒にきまってんじゃない。
麻子 うわー気になるー。
伸治 それは駄目。言えない。
麻子 そうなの。で。
伸治 で、それも騙されたっぽくってお金もらえなくて。どうしようもなくなっ
麻子 て。自殺未遂に失敗した。
伸治 麻子ちゃんが?
麻子 うん。
伸治 ……自殺未遂に失敗って。……だったら、死んでない? 既に。
麻子 え? あ、ほんとだ。
伸治 未遂に成功ってことだよな。
麻子 そうそうそう。あはははは。おもしろい。馬鹿みたい。
伸治 びっくりした。だったら麻子ちゃんすでに幽霊じゃん。
麻子 ほんと、うっける。

一同、笑うが、麻子のあまりの爆笑に、伸治と陽一はひいてしまう。

麻子 あああ。お腹痛い。
伸治 ほんと。
麻子 で、1位。
伸治 きたー! 1位どうなるの。
麻子 1位はね。
伸治 うん。うん。
麻子 今も私が生きていること。
伸治 は?
麻子 これはもう一億の賠償責任ありだね。だから、一億あたらないうちは、絶
伸治 対寿命は全うしてやろうって決めてんの。以上。
麻子 ……。
伸治 あー、ほら引いたでしょ。
麻子 別にいいんじゃない。麻子ちゃん生きてても。
伸治 仕方ないよね。蟻だつて、胴体真つ二つでも、けっこうしぶとく生きてる
麻子 位だし。
伸治 ……いや、麻子ちゃん、いい。
麻子 なに。
伸治 いい。な。
陽一 うん。

伸治 それだけキツイこと、ここまで明るく振り返られるんだし。すげーよ。俺
伸治 だったらとつくに精神崩壊してると思う。たくましいと思うよ。な。
麻子 意外と丈夫なんだよ人間。
伸治 なんだか、言葉の重みが違うね。
陽一 なあ、飯いかない？
伸治 なに。また腹減った？
陽一 減らない？
伸治 ほんと生命力に満ちてるよな。
陽一 どこいく？
伸治 せめて出前とかにしない。
陽一 なんだだよ。
伸治 休みの日とか、外あんまり出たくないんだよね。損した気分になる。
麻子 おまえなあ。
伸治 いいよ、出前で。
陽一 ごめんな。ほんと我儉な奴。
伸治 悪い。
陽一 じゃ、俺買ってくる。近くですげー旨いとこ知ってた。
伸治 巴寿司。
麻子 そう。ご馳走すんよ。
伸治 いいの。
麻子 楽しかったし。お礼。

麻子 やった。
伸治 ちよつ待ってて。
陽一 店ないかもよ。こないだ俺これで（携帯ゲーム）撤去したし。
麻子 はははは、こわーい。
伸治 あっそ。

伸治 伸治、出て行く。
麻子 おもしろいねー、伸治君。変わってるよねー。
陽一 ……だろ。
麻子 ……音楽、消していい？
伸治 あ、うん。

麻子 麻子、ラジカセを止める。
陽一 二人、携帯ゲームを始める。
（画面を良く見て）……あれ。
麻子 それもプレゼント。
陽一 ……ありがとう。

陽一、それ以上の対応ができず、ゲームを続ける。

麻子
陽一
なんかね。
ん？

麻子
陽一
前世が同じ気がしますね。

麻子
陽一
……え？ 何？

麻子
陽一
私と。

麻子
陽一
俺？

麻子
陽一
うん。二世代前。

麻子
陽一
……ごめんわかんない。

麻子
陽一
ふうん。

麻子
陽一
いや、あの、うんわかった。わかったっていうか。

麻子
陽一
また、遊びにきてもいいですか。

麻子
陽一
え。いいよ。

麻子
陽一
ゲームじゃなく。

麻子
陽一
ここ？

麻子
陽一
うん。

麻子
陽一
……別に、いいけど。

陽一、ゲームに集中する。

麻子も、ゲームをはじめる。

麻子
陽一
完全に変な子だとおもってるでしょ。
そんなことないよ。

麻子
陽一
人前苦手だし、わけのわからないことを口走ってしまっ
作り話？

麻子
陽一
ううん。違うけど。

麻子
陽一
ふうん。

麻子
陽一
ほんとですけど。

麻子
陽一
人前ってってたって……俺と仲治だけじゃん。

麻子
陽一
上手に話せる人とか苦手だし。

麻子
陽一
なら、こんなふうには、出てこなかったらいいのに。

麻子
陽一
それは嫌。

麻子
陽一
そうなんだ。

陽一、わかった風な顔で何度かうなずく。

仲治が、慌てて戻って来る。

息を切らしている。

陽一

麻子
陽一
え。

麻子
陽一
うっそ。

麻子
陽一
この世界は、ウンコに支配されている。

麻子
陽一
え？

麻子
陽一
まじで。

陽一と伸治、爆笑。
陽一、窓辺へ。外を眺める。

麻子
伸治
麻子

なに。
つぶれてた、寿司屋。
え。ほんとに。

麻子も窓へ。
ふたり、外を眺めている。

陽一

俺が支配してる。

鉄骨を叩くような建築の音、重機のエンジン音が不気味に鳴り響く。
伸治、出て行く。
そのまま数日後となり、建築の音は遠く聞こえなくなる。

【4】

夜明けの頃。

陽一は、ソファに戻りゲームを始める。
二人は少しの緊張感とともに特別な時間を、
初々しく虚勢を張って過ごしてる。

麻子
陽一
麻子
陽一
麻子
陽一
麻子
陽一
麻子

原形とどめてないね。この町。
そもそも無理だよ。発展させすぎた。
もったいない。ちゃんと再現できてたのに。
そんなこと言っつて。ライバルの成長が怖いんだろ。
ちがいます。
空港の建築短縮しよ。800円だし。
追いつく気？ 無理だよ。
わかんないよー。最近の資本投下半端ないし。

麻子もゲームをはじめる。

麻子
陽一
麻子
陽一
麻子
陽一
麻子
陽一
麻子

楽。一緒にいると。
俺が、廃人だから。
軽く。
ひどーい。
褒めてるんだけど。
(ゲームの画面を見て) この人らつて、かわいそうだよね。
ん？
されるがまま。なに考えてんだろ。
考えるわけないじゃん。

陽一　でもさ。科学もどんどん発展してるし。ひよっとしたら、何か考えてるか
もしれないって思わない。アンドロイドみたいに。
麻子　おなかすいたなあとか？
陽一　あ、コンビニできた、ラッキーとか
なんか、かわいいじゃんそれって。
麻子　わかる。かわいい。
陽一　空気つくったら読むとことか超かわいくない？
麻子　ん、なに、どっち。ゲーム。
陽一　ゲームにきまってんじゃん。
麻子　それなに。
陽一　知らない？
麻子　課金かかる。
陽一　かかるけど、空気つくったら読むから、デモとか減るし。
麻子　そんなに起きてないよ。
陽一　起きるんだって。ほっといたら。
麻子　へえ。
陽一　いちいち建築期間伸びるし。
麻子　詳しいね。
陽一　それくらい調べたら出てくるし。
麻子　そうかあ。いかな。

陽一、真剣にゲームに取り組む。

陽一　コンビニ、全然オープンしないよね。現実の方ね。近所の。
麻子　撤去するからでしょ。
陽一　関係ないだろ。
麻子　あるんだって。
陽一　まじで。おいとけばよかった。
麻子　見てみて、もうすぐ総理。
陽一　総理！　まじで。いつの間に。
麻子　ほらね。無理なものは無理。差は開く一方だねえ。
陽一　うわー。きつー。
麻子　せいぜい、コツコツと発展させるがよい。
陽一　ようし。なあ、見てみて。

陽一、携帯画面を麻子に見せる。

麻子　なに。
陽一　原発。
麻子　え。
陽一　原子力発電所建てようかな思つて。
麻子　えええ。なんか、自粛しなきゃ。今どきそういうの。
陽一　ゲームじゃん。
麻子　ゲームでもさ。

陽一 時効だって。世の中の的に最悪。

陽一 ちょ待ってよゲーム。

陽一 県知事でしょ。ロックかかっているんじゃない。総理にならないと。

陽一 課金5000円いるけどロック解除できるみたい。

陽一 そんなにかかるの！

陽一 さらに建築時間短縮するのに2000円。

陽一 うわー。

陽一 でも、すごいよ、1つでこれだけのエリア全部賄えるし。公害ないから公園もつくらなくても人減らないみたい。

陽一 禁断のアイテムでしょ。

陽一 それってちよっとテンションあがんない？

陽一 課金も高いし、やめといたほうが。

陽一 いい。いつまでも麻子ちゃんに追いつけないし。えい。

陽一 あっ。

陽一 買っちゃった。

陽一 思い切るなあ。

陽一 すぐバイト代も入るし。

陽一 心配。

陽一 え。

陽一 爆発したりしたらどうすんの。

陽一 そんなときは、一からやりなおす。追いつけないじゃん、こうでもしないと。

陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子
陽一 麻子

陽一 陽一君の町、なくなったら、寂しい。

陽一 ごめんな、無茶して。

陽一 知んないからね。どうなっても。

陽一 大丈夫だって。超レアケースだよ。

陽一 大事にして。

陽一 ……うん。

なぜか、一瞬、いい雰囲気。

麻子、携帯を操作する。

陽一 あれ。

陽一 プレゼント。

陽一 なにこれ。

陽一 犬小屋。

陽一 そんなのあったっけ。

陽一 うん。小さい頃、犬飼いたかったの。

陽一 飼わなかったの

陽一 親が動物あんまり好きじゃなくて。臭いとか特に。

陽一 変なの。かわいいのに。

陽一 だから。

陽一 収入はいるの、これで。

陽一 ううん、アクセサリ。ただの飾り。

陽一　　そうなんだ。
麻子　　ごめんね、あんまりスペースないのに、無駄なものつくって。邪魔だった
陽一　　ら撤去していいから。
いいよ。そのくらい。

遠くから犬の鳴き声。

麻子　　聞こえた？
陽一　　うん。
麻子　　ほら。ちょっと怖くない？　偶然じゃなくない。
陽一　　ありえないでしょ。
麻子　　そうなんだけど。
陽一　　じゃ、ためしにさ、このアパート撤去してみる？
麻子　　ここ？
陽一　　うん。残してたんだ、まだ。(画面を見せて)ほら、これ。
麻子　　うん。え、これを撤去するってこと。
陽一　　うん。したら俺らなくなる？
麻子　　どうかな。……本気？
陽一　　覚悟はいい？
麻子　　まだ1億円あたってない。
陽一　　あたらないよそんなの。それこそ超レア。
麻子　　大丈夫かなあ。

陽一　　……じゃ、いくよ。
麻子　　……ちょっと待って。
陽一　　なに。
麻子　　やめとこ。なんか、怖い。
陽一　　ぜって大丈夫だって。
麻子　　やめとこって。
陽一　　いくよ。3、2、1。

麻子、目を閉じる。しゃがみ込んで耳をふさぐ。

陽一　　撤去。

陽一、あたりを見わたす。
麻子、そおっと目を開き……

麻子　　大丈夫みたい。
陽一　　うん。
麻子　　撤去された？
陽一　　あ、本当に撤去しますか？　はい、いいえ。になった。
麻子　　なにそれ。
陽一　　はい。と。
麻子　　あつ。

陽一 生きてる？

麻子 変わらず。ほんとに撤去した？

陽一 (画面を見せて) ほら。

麻子 なんだ。心配して損した。

陽一 大丈夫だっていつてんじゃない。

麻子 わかるけど。

陽一 跡地に社宅建てよ。

麻子 なにそれ。

陽一 ふつうの会社員が住んでるんじゃないね。普通に働いてる。まあまあかっこいい。給料の愚痴とか言ってる。そのくせことなかれ主義で。されるがままでさ。

麻子 なにいつてんの。

陽一 イメージ。

麻子 なんだか眠くなってきた。

麻子、ソファの上に横になる。

横になって、陽一の足に自分の足を乗せる。

陽一 なに。

麻子 ぜいたく。

陽一 ん？

麻子 人間の上に足を乗せるなんて、つていう、ぜいたく。

陽一 ?……ぜんぜんいいよ。

麻子 雑魚寝の生存競争に負け続けたし。

陽一 なにそれ。

麻子 合宿とか、ぐだぐだの飲み会の最後とか。いつも。

陽一 好きな人いるのに、他の子といい感じになれちゃうやつ？

麻子 競争が無いってのは、ほんといいね。

陽一 それってさ。

麻子 そんな意味じゃなくて。

陽一 いいけど、実際いないし。

麻子 あああ、……犬飼いたかったなあ。

朝日が差し込んでくる。

麻子 もう朝だね。完全に。

陽一 うん。

麻子 嫌な感じ。みんな起きてくるし。

陽一 俺も、思う。

麻子 今日も、バイト？

陽一 うん。

麻子 眠くなんないの。

陽一 眠くなる。
麻子 休んだら。
陽一 でも、いつか休んだら、二度といかない気がして。
麻子 いいじゃん。そんならい。
陽一 でも。
麻子 ねえ。
陽一 ……だめなんだって。決めたの。

麻子、足を乗せたまま、体を起こす。

麻子 なにを。
陽一 ちゃんと、働くって。
麻子 どうして。
陽一 戦ってんの。俺は。
麻子 意味分かんないけど。行きたいのそんなに、仕事。
陽一 行きたくねーよ。
麻子 なら。
陽一 でも、そうするしかないじゃん。言い訳したくないし。
麻子 一日くらい。いいじゃん。

麻子、陽一をじっと見る。
陽一、じっと見返す。

麻子 ここで寝る。

麻子、再び横になる。
陽一、麻子の足の指をじっと見つめる。
足を手に取り、指を丁寧に調べる。

麻子 なにしてんの。
陽一 指、ちいさいな。
麻子 ふつうだと思っけど。

陽一、調べ続ける。

麻子 行くんだね。仕事。
陽一 ……うん。
麻子 じゃ、帰って寝る。一緒に起きるのつらいし。
陽一 え……うん。

麻子、帰る準備をする。

麻子 ……また。
陽一 まって。

麻子

なに。
ほんとに帰るの。

陽一

ほんとに休まないんでしょ。

麻子

……。

陽一

だから。

麻子

……あのさ。

陽一

なに。

麻子

いかなかったら、いるの。

陽一

いるよ。

麻子

まじで。

陽一

どうするの。

麻子

まじかく。

陽一

……はやくきめて。

麻子

陽一、考え抜く。

陽一

……じゃ。

麻子

なにそれ。……じゃね。

麻子、出て行く。

陽一、座って目を開いたまま、じっとしている。

随分と長い間、じっとしている。

【5】

そのまま数日後となる。夜の八時頃。

伸治が入ってくる。

陽一

どうしたの。

伸治

近くまでできたから。いなかったから、その辺で時間つぶしてた。

陽一

そうか、悪いな。

伸治

今、仕事終わり？

陽一

そ。

伸治

遅いな。

陽一

残業だよ。

伸治

よく続いでるよな。

陽一

慣れた。慣れるもんだね。

伸治、携帯を操作し始める。

伸治

な、これ。

伸治、携帯の画面を陽一に見せる。

陽一 お前も始めたの。
伸治 仕事やめてから始めたんだ。暇だしな。
陽一 もう市長。
伸治 そ。
陽一 早いな、成長。
伸治 すぐ追いついてやる。
陽一 町友なろうぜ。
伸治 もちろん。
陽一 追いつくのは無理だけどねー。
伸治 甘いな、途上国の勢いを知らないの。遠慮しねーし。
陽一 こっちから申請するよ。

陽一、携帯を操作している。

伸治 俺さ、仕事きまったんだよね。
陽一 もう？ さすがだな。
伸治 うん。
陽一 なにするの、今度。

伸治、持ってきた缶コーヒーを飲む。

伸治 今井んところ。

陽一 ……え。ほんとに!?
伸治 うん。
陽一 ……えどうして。
伸治 どうしてって言われても。条件とか。
陽一 ……じゃ、これ。(ゲーム) つくるってこと。
伸治 つくるっていうか、プロモーションの企画、みたいな。
陽一 なんかずげえ。教えてよ色々。裏技とか。
伸治 あつたり前じゃん。教えてやるよ。
陽一 うわ、うれしいな、それ。
伸治 正社員の可能性もあるらしいし。
陽一 飯でもおごるよ。
伸治 いいよそんな。
陽一 気にすんなって。
伸治 祝うようなことじゃねーし。
陽一 いいじゃん。ウンコも、いい奴だつて。
伸治 いい奴だったよ。すげー親身になってくれたし。
陽一 ほら。
伸治 立派なもんだな。
陽一 そりゃそーだよ。

陽一、携帯を操作する。

陽一 携帯見てみ。
伸治 ん。

伸治、携帯を操作する。

伸治 あれ。
陽一 俺からのプレゼント。
伸治 なにこれ、犬小屋。
陽一 俺も、犬飼いたかったし。
伸治 俺も？
陽一 ささやかだし。いいだろ。気を使わなくていいし。
伸治 まあ。
陽一 何の役にもたないけどな。

伸治、画面をしばし眺める。

伸治 麻子にも、もらったんだよな。これ。
陽一 あそうなんだ。
伸治 でも、いいや。ありがたく、設置しとく。

二人、ゲームを続ける。

伸治 ……麻子な。
陽一 なに。

陽一、手を止める。

伸治、ゲームを続けている。

伸治 ……俺な。
陽一 うん。
伸治 すげー、言いくいんだけどさ。
陽一 なんだよ。

伸治、ゲームを続けている。

伸治 ……付き合うことになった。
陽一 ……はあ?!
伸治 驚いた。
陽一 うそ。
伸治 ほんとだよ。
陽一 ……どうして。
伸治 なりゆきで。
陽一 ……そう。
伸治 頭おかしいって思ってるだろ。俺のこと。

陽一 別に。
伸治 (茶化して) あんな、イタイ子とつきあうなんてとか。
陽一 思っていないよ。
伸治 イタイよ相当。あいつ。まじで。
陽一 うん。

陽一、ゲームの画面をじっと見る。

伸治 未遂とか、ほんと、マジみたいだし。
陽一 うん。
伸治 宝くじとか、完全に嘘だし。
陽一 ……(驚くが) ああ、らしいな。
伸治 でもな、ちゃんと生きてて。
陽一 うん。
伸治 無理やり生きてて。なんか、この世にしがみついているみたいな。
陽一 うん。
伸治 オロナミンCのCMみたいで。
陽一 うん。
伸治 そこがさ。ファイトー一発！ みたいな。
陽一 リポビタンD？
伸治 そっち。…そんな感じですがー食欲で。
陽一 うん。

伸治 かわいいんだよ。
陽一 うん。
伸治 すげー。
陽一 いいな。
伸治 いいだろ。イタイけど、かわいいし。
陽一 うん。

会話がとまって、ゲームが続く。

伸治 でも、麻子が。
陽一 うん。
伸治 怪しい宗教っぽいのにハマッてて。
陽一 そうなの。
伸治 うん。すげー勧誘されてて。
陽一 まじで。
伸治 どうしたらいいかな？
陽一 うん。

陽一、答えが出せず、沈黙してしまう。
伸治、ゲームをやめる。

伸治 ま、いいけど。大問題じゃねーし。

陽一　いいんだ。
伸治　なんだかんだいっても、ウソコの仕事、決まったし。
陽一　うん。
伸治　一応、それなりに、晴れやかではある。
陽一　よかったじゃん。
伸治　お前だけには報告しようと思つて。
陽一　うん。
伸治　つてことで、帰る。用事、そんだけ。
陽一　あ、そうなんだ。
伸治　うん。

伸治、出て行くこうとする。

陽一　……ちよまてよ。

伸治、普段の陽一からは想像できない反応に驚く。

陽一、伸治を無理やり連れ戻す。

陽一　知ってるだろ。
伸治　あん。
陽一　俺と麻子のこと。
伸治　知ってる。

陽一　だったらどうして。

陽一、伸治に掴みかかる。

伸治　なにすんだよ。

完全に伸治の勝利。陽一は飛ばされる。

伸治　別につきあつてたわけじゃねーだろ。
陽一　つきあつてる。
伸治　麻子言つてたぜ。そんなんじゃないつて。
陽一、伸治に再び掴みかかる。

伸治　八つ当たりすんなよ。

陽一、再び投げ飛ばされる。

伸治　それでも、悪いな思つてるよ。まじで。それなりに。
伸治、出て行く。

陽一 なんだあいつ。世の中腕力か。

布団に横になる。携帯ゲームを始める。
だが、集中できない。やめる。

陽一 あーっわけわからん。

ふたたび、ゲームを始める。

陽一 え。……あれ。

画面を凝視する。

ゲームの世界で何か事故が起きたようだ。

陽一 ……ちよつと、ウンコ。嘘だろ。

携帯を操作する。

陽一 まじかよ。

携帯を投げつける。

我慢ならず、本棚などに八つ当たりする。

狭い部屋の中ひとしきり暴れ倒す。横になる。

陽一 ……終わった。

【6】

翌朝に思えるような数日後。日曜日のひるさがり。

陽一はそのまま、荒れ果てた部屋の中で眠っている。

そこに、洋子が入ってくる。陽一は気がつかない。

洋子 ……。

洋子はじっと陽一がおきるのを待つ。

陽一、ようやく人の気配を察し、おもむろに目を覚ます。

陽一 ……。

部屋にいたって無用心だから鍵しめなさいって、何回も言ったじゃん。

陽一 ……ごめん。

洋子

あがっていい？

陽一、起き上がる。うなづく。

陽一

……どうしたの。

洋子

……調べにきた。

陽一

なにを。

洋子

生きてるか。

陽一

余裕で生きてるけど。

陽一、部屋を片付けはじめる。

洋子

ひどいね。部屋。

陽一

今日だけだって。

洋子

大丈夫？

陽一

……どうして。

洋子

ん。

陽一

どうして、調べるの。

洋子

んん、責任感？

陽一、部屋を片付けはじめる。

陽一

座ったら。

カバンから一枚の紙を取り出す。

陽一

洋子、見て欲しいものがあるんだけど。

洋子

なに。

陽一

これ。

陽一、その紙を渡す。洋子、それを見る。

洋子

……なにこれ。

陽一

タイムカード。

洋子

わかる。

陽一

まだ、続けてんだ。お客様センター。

洋子

そう。

陽一

見て。

洋子

なに。

陽一

無遅刻無欠勤。

洋子

……。

陽一

どうこれ、すごくね。5勤2休、5勤2休。なんか綺麗じゃね、並び。

洋子

ほんとだね。

陽一

何回もさ、危機的状況におちいったんだけど。

陽一 洋子 ……
陽一 しゃれんなんない危機もあった。
陽一 ……
陽一 それでも、休まなかったんだ。
陽一 偉いね。
陽一 これ、ほんとは、持って帰っちゃいけないんだけど。
陽一 だろうね。
陽一 眺めてると、明日も行こうって思えたから。毎日持って帰ってるんだ。
陽一 ……
陽一 約束したからさ。ちゃんと働くって。

洋子、うなずく。

陽一 (笑って) 初日からやばかったけど。
陽一 ふうん。
陽一 こんど、マラソン大会とかあってさ、お客様センターなのに。すごいやべ
陽一 ー。どんな巽なんだよって感じだよな。
陽一 自業自得じゃん。
陽一 ……そう思う。
陽一 適当に書くからだよ。
陽一 でもな、練習するんだ。マラソン。
陽一 陽一が。

陽一 なんか、バレたくないし。
陽一 そっこーバレると思うよ。

陽一、携帯を手取る。

陽一 ……ただ。
陽一 ん。
陽一 ゲーム。
陽一 うん。
陽一 バイト代ほとんどこれにつっこんじやって。全然金ないんだよね。だ
陽一 から、借金はあんまりかえせてなくて。そこはごめん。
陽一 馬鹿じゃないの。
陽一 だから、やめたんだ。ゲーム。

携帯を置く。

陽一 俺、ゴルフにも誘われてて。
陽一 ゴルフ？
陽一 凄くない。俺がゴルフだよ。
陽一 やったことあるの。
陽一 こないだ、一回練習行った。
陽一 だれと。

陽一 お客様センターの人と。
洋子 すごいな。

洋子は少し感動している。

陽一 だから。やつぱ。もう一回、一緒に住みたいんだけど。無理かな。

洋子、真面目な顔になる。

洋子 ……無理。

陽一 どうして。

洋子 ……生活があるから。
陽一 なに。

洋子 ……えなに。結婚とかしてるの。

陽一 ……えなに。結婚とかしてるの。
洋子 ……えなに。結婚とかしてるの。
陽一 ……えなに。結婚とかしてるの。
洋子 ……えなに。結婚とかしてるの。
陽一 ……えなに。結婚とかしてるの。
洋子 ……えなに。結婚とかしてるの。

陽一、少しだけ笑う。

洋子もつられて笑う。

陽一 ……必死だな。

洋子 ごめんね、突然来て。

陽一 ううん、うれしいけど。

洋子 でももうこないから。絶対。

陽一 ……。

洋子、タイムカードを見る。

陽一 ……すごいだろ、なんだか、俺の歴史が詰まってる感じしない？……8時58分、8時55分、8時43分、8時50分、8時46分……。

音楽入る。

洋子、タイムカードを陽一に返し、陽一はそれを受け取る。

洋子、立ち上がる。陽一は見上げる。

洋子、ゆつくりと部屋を出て行く。

陽一、座ったまま、洋子を目で追うことなく、タイムカードに視線を戻し、じっと見つめる。

溶暗。

おわり。

選評

長田育恵（劇団ユニットてがみ座 主宰）

今回は優秀賞を二作選出という結果になりました。全体的に手堅くまとまっています。全作に、少しずつ触れさせていただきます。

『浮いていく背中に』詩的な文体や断片に宿される光に好感を持ちますが、それらを用いることであぶり出そうとするものが観客に迫ってこない。現時点では、俳優の身体を通して存在するものより作者の手つきの方が表出しているのが惜しい。

『ブスとたんこぶ』作者が描こうとする人物の人間性に最も興味を惹かれました。ですが台詞や筋に既視感があり、設定が濼のように淀んで作品の魅力を曇らせている。設定を間引いて、今ここで立ち上がる人物描写に注力したら力強さを獲得するのでは。

『流れんな』台詞が芝居の空気感を孕んでいて魅力的。提示される話題も興味深い。けれど芝居の骨子が話題の移り変わりに依って、舞台上で今立ち上がるドラマが薄い。太いドラマにしている筆力のある方だと思う。

『中央区今泉』群像劇ではあるが個々のキャラクターが掴みやすく、登場人物の心情もうまく組み上げられている。綺麗にまとまっていると感じるが、それだけに設定や登場人物配置、筋に既視感が否めない。

『戦うゾウの死ぬとき』男と女が何度も出会い直すという試みは興味深く、終局に事態が

動き出したとき爽快感がある。けれど戯曲としては大雑把。不条理の中にきめ細やかなりアリティを埋め込んでいけば、より魅力的な作品になるのでは。

『終わってないし』ささやかな日常を見つめ丁寧に組み上げていて、細部に光が宿っている作品だと感じます。ただ演劇としてはまだ幹が細く、射程距離が狭い。こまやかな感情を汲みとる実力を持った作者だからこそ、もっと大胆に踏み出すこともできるはず。

最終的に『ぼくの、おばさん』を推しました。舞台上に推進力と生命力があり、観客を引き込む力が強い。そして観劇後、確かに観客の記憶に焼き付く情景があると思う。手法としては新たな座標を持ち込むものではないが、演劇作品として最も熱量を感じました。

既視感のある場所には安心感と一定の保証が伴うと感じるかもしれませんが、でも作者にしか生み出せない景色を探し求める時にこそ、作者の奥底のエゴが晒され作品がこの世で唯一のものとなる。大きなエネルギーを内包する。自分が心底面白いと思う作品を求め、どこまでも果敢に。皆さんの次作を楽しみにしています。

齋藤 歩（劇作家・演出家・俳優・札幌座チーフディレクター）

昨年同様、まず、積極的に大賞に推せる作品がないという残念な印象で、二次審査に臨みました。昨年はそんな印象の中でも、一つ、群を抜いていた作品があったので大賞作品を選ぶことが出来ましたが、今回、いずれも他と比べて抜きん出た評価点を見出すことができず、苦しい審査会となりました。私以外の委員の皆さんも同様な印象であったため、かなり時間をかけてギリギリまで議論をしました。折角の北海道戯曲賞なのに「大賞な

し」という結果は、あまりに寂しい気がしたのです。私もギリギリまで悩みました。しかし、どれを選ぶのかと言う所で、抜きん出たポイントが見つけられず、「大賞なし、優秀賞2作品」という結果に委員全員の意見が一致したのです。

気になったのはいずれも戯曲のスケールが小さいのではないかと。小さいことが悪いのではないと思うのですが（私の戯曲はかなり小さいものばかりですから）、もっと大きなスケールの戯曲が最終審査に残って来てもいいのではないかとも思うのです。近年の日本の演劇の傾向なのか、この戯曲賞の存在告知の方法などに問題があるのか、今後検討しなければならぬのかもしれないと。

北海道で演劇をしている者として、北海道の劇作家の作品が一つだけ最終選考に残り、それが身内でもある、すがの公くんの作品であったことも、気分的に複雑でした。実にすがのらしい戯曲だとは思いましたが、他と比べるとやはり、構造や台詞に弱点多かったです。彼のことを知らない委員の皆さんの御意見も同様でした。今後、もっと違う世代の俳優を想定した戯曲にも挑戦して、力をつけてまた挑んでもらいたいと思います。

土田英生（劇作家・演出家・MONO代表）

大賞は出ない年となってしまったが、そのことも最後まで悩んだ。しかし、それは北海道戯曲賞をどういうものにするべきも含めスタッフや他の審査員の人たちと議論した結果だった。

北海道戯曲賞で私が最も興味を惹かれる点は、賞に「北海道」という冠をつけているに
もかかわらず、応募者を場所で限定していない所だ。もちろん、北海道の劇作家の皆さんの活躍を期待するのは当然だ。だから例えば応募者を北海道で活動している人に限るという方法だってある。この場合、受賞者は北海道の劇作家になり、それなりのメリットも生まれると思うが、賞自体が内向きに閉じてしまうという側面も出てくる。

全国の作家を対象にすることで、より広い作品が集まり、全国からの注目も増す。北海道で活動している人にとっても刺激や交流が生まれる。その為には「どの作品を大賞とするか」をしっかりと考えないといけないのだと思う。今回の大賞なしの結果は、この賞は相対評価だけで戯曲を選ぶのではなく、北海道戯曲賞をより魅力的な賞にする為の選択だった。そうして高まったこの戯曲賞を北海道の作家が取ることもあるんだと思うし、なによりその時を期待している。

個々の作品の印象を書かせてもらう。

池田さんの「ぼくの、おばさん」には引き込まれた。急一から見たタイプの違う二人のおばさんを描いているのだが、なにより台詞の距離感が絶妙で、地に足が付いて言葉が選ばれていることが分かる。こうした台詞の一つ一つは池田さんの確実なセンスに裏打ちされてこそのものだと思う。急一が緊張して実体感覚を失う描写も演劇的且つ効果的で、また、色気のある千代子に対する思春期男子が抱く甘酸っぱい感情などは手触りを持って伝わってきた。しかし、ドラマとしての展開がいささか平板であり、周りの人たちの行動や展開に、もう一つうねりが欲しいと感じた。そうしたドラマを避けるのであれば、急一の心の壁を掘り下げるなど、別の手もあった気がする。もう一つだけ意見を書かせてもらったら、タイトルがやや辛い気がした。捻った挙句、意図的に陳腐なところに着地させたのだと思う。読点の打ち方などから勝手にそう想像するのだけれど、それでも逃げ切れない印象だった。

もう一つの優秀賞だった南出さんの「終わってないし」も読むことに労力を割く必要はなかった。冒頭からすんなり劇世界に入ることができ、ストレスなく読み続けられた。それだけに読み終わった時の物足りなさが際立ってしまったのかも知れない。彼はとても手練れな作家で、他にも何本も読ませてもらっているが、今回の作品で致命的にもったいなかったのは、話が明らかに後半で端折られてしまっている部分だった。書き足りていないことは南出さんも自覚している気がする。陽一と麻子の関係にしても、ラストでの洋子とのシーンにしても、頭では理解できるが、気持ちを追いついていかないのだ。「終わってないし」というタイトルにそういう意味も込めているのではないかとすら深読みしたが多分違う。中盤からラストにかけて、もう一シーン欲しい。また、ゲーム上での操作と現実がリンクして行くくんだりも、それが話をになり切らずに終わってしまったのが悔しかった。

「浮いていく背中に」の原田さんはエピソードや語られる台詞にとってもない力を感じるし、基本的に登場人物がずっと後ろ向きに歩いているという仕掛けも面白い。ただ、モノローグの魅力に比べ、人物同士の接触には興味を惹かれずに終わってしまった。読めばいいのだが、戯曲としては物足りなかった。また、「浮いていく背中に」というタイトルと共に、踏切を越えて行くくだりはとても爽快で哀しいイメージを喚起されるのだが、それがもう少しこの戯曲全体を包み込んで欲しかった。

「流れんな」は上演も観ているのだが、その時と同じ印象だった。横山さんとはにかく台詞がうまい。そのニュアンスに引き込まれて騙されそうにはなるのだが、どこか心につかかりが残る。注意深く読んでみると、登場人物がその台詞を発話するための理由が不明であったり、その言葉が零れる地点までモチベーションが高められていないことがわかる。会話を主体とした戯曲を書く場合、台詞は自然と流れていかなければいけない。つまり、作者が顔を出してはいけないのだが、時々作者の力みが見えてしまうのが惜しい。

「中央区今泉」はこれだけの登場人物を上手に動かしているとは思った。登場人物それぞれの悩みを群像として描きたかったのだろうが、それにしては個々が抱えている人生の悩みがステレオタイプすぎる気がする。また、場所をタイトルにしているのであれば、その場所が変遷していく様子を見せるなどもう一つ仕掛けが欲しかった。もしくは、おしゃれな街だといわれている今泉と、そこで生活する人々の不器用さの対比など、何かしら。「ブスとたんこぶ」は会話も自然だし、人物配置が上手だと思ったが（特に基子と留美）、人物造形が固まり切っていない感じがした。特に喜子の変化などに感情移入することができなかつた。

「戦うゾウが死ぬとき」は読みながら混乱した。なにかあるようで、それでいてそれが見えてこない。最初は分析的に読んでみたが、それでも整理がつかなかった。パズルのピースをはめるように理解する必要はないのだが、だとすれば、イメージなりがもつと立ち上がって来なければいけない。抽象で話を進める場合、ある諒解感が必要な気がする。読む側の問題もあるのかも知れないが、私には届かなかつた。

畑澤聖悟（劇作家・演出家・劇団「渡辺源四郎商店」店主）

2次審査に残った7本はどれも一定の水準に達していたと思う。しかしどれも大賞かというと首をかしげてしまった。決め手がないのだ。

最初、「浮いていく背中に」を面白く読んだ。既視感のある語り口だが、十分に世界の広がりを感じられた。身体へのこだわりがバック歩きの不自由感と相まって独特の閉塞感を

現出させている。緊張のある空気がいい。多用される「出た。出てしまった」というような言い直しをはじめとする独特な言い回しは悪い意味に技巧的でルーティーンのようにピンと来なかった。

「ぼくのおばさん」は熊本弁の語り口が魅力的。急一の独白がナレーションのように入ってくるが、何もかも台詞で説明してしまつて行間がなく、窮屈な印象。最終的にはこの作品を推したが、大賞とするには残念ながら何かが足りない。

「戦うゾウの死ぬとき」は魅力的な筋立てであるが、終盤で夫婦の物語に落とし込んだ瞬間、スケールダウンしたように感じた。思わせぶりの展開だが世界が広がらないまま終わった印象。象や釘などのモチーフが作品に貢献したかどうかは疑問。惜しい。

「終わってないし」は現実世界でのドラマがもつと見たかった。会話のリズム感には好感が持てた。「ブスとたんこぶ」は「ブス」という単語を敢えてタイトルに使ったが、しかし喜子の問題は容姿上のつまりブスであるかどうかということではない。「たんこぶ」にも愛は感じられない。アイロニーにもなっていないので、これでは不快なだけではないか。全体的に悪くないと思うのだが、綺麗に揃いすぎの印象。不幸や貧乏がステレオタイプと感じた。

「中央区今泉」は地方都市における都市部と農村部の相克が浮かび上がってくるが、どこか浅い。登場人物がいい人ばかりでスリルがない。

「流れんな」は御都合主義な展開。企業の重大事を最もバラしてはいけない立場の人間に向かってペラペラしゃべるのはそれなりの理由が必要。ラストで何もかも解決してしまふのはいかがなものか。テーマ盛り込み過ぎ。

前田司郎（作家・劇作家・演出家・映画監督・五反田固 主宰）

昨年に引き続き、審査に参加させていただいた。候補作を全て読んで僕は困った。大賞に押せる作品がなかったからだ。全ての作品が綺麗にまとまっている。まとまっているのが悪いわけではないが、上手な戯曲なんて読みたくもない。書き続ければ嫌でも上手くなるのだ。一番上手い人を決める大会なら作家が審査する必要もない。下手でもなんでも才能が見たかった。技術は欲望を抑制するのではないだろうか。欲望を欲望のまま提示する方法もまた技術だとしたら、それが今回の候補作には足りなかったと思う。全ての作品をまとめて評するのは失礼だと思うが、あえてまとめて評する。ファミレスの料理みたいな戯曲に感じた。美味しくて安全。僕はこれじゃ駄目だと思う。どうせなら毒が食いたい。僕が間違っているかも知れない。間違っていたら、五年後十年後に、僕はいないだろうから、それで判る。

皆さんには才能があると思う。小さくまとまらないで欲しい。糞みたいな戯曲でも良いから、作家の生の欲望が見えるものを書いて欲しい。僕もそこを目指して頑張ります。偉そうなことを言ってしまうせいでした。でも、賞なんて糞食らえ、お前ら審査員なんかより俺の方が面白いに決まっているだろう、という気持ちで来年また応募してください。

第2次審査（最終結果）

- ・大賞 該当なし
- ・優秀賞 池田美樹（熊本県）「ぼくの、おばさん」
南出謙吾（東京都）「終わってないし」

表彰式

優秀賞を受賞されたお二人の表彰式を、平成26年度希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」大賞受賞作品「悪い天気」本公演の終演後に行いました。

- ・実施日 平成28年1月30日（土）
- ・会場 かでる2・7ホール
（札幌市宇中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル）



池田美樹氏



南出謙吾氏

お問い合わせ

北海道舞台塾実行委員会

〒060-0042 札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F
TEL. 011-272-0501 / FAX. 011-272-0400（公益財団法人北海道文化財団内）

あとかき

北海道戯曲賞（主催 北海道舞台塾実行委員会）は次代を担う劇作家を発掘するとともに、優れた作品を道民の皆さまに提供し、演劇の楽しさを知っていただくことを目的に平成26年度に立ち上げました。

平成27年度は、前年度を上回る76作品の応募がありました。

第1次審査で7作品を選出し、第2次審査では予定の審査時間を越えるほどの熱い議論が交わされ、その結果、優秀賞2作品を選出しました。（大賞該当作品なし）

募集期間 平成27年6月上旬～平成27年9月25日（金）

作品応募数 76作品（道内16作品／道外60作品）

第1次審査会

平成27年11月9日（月） 公益財団法人北海道文化財団内 会議室

第1次審査通過作品

- ・池田美樹（熊本県）「ぼくの、おばさん」
- ・幸田真洋（福岡県）「中央区今泉」
- ・すがの公（北海道）「戦うゾウの死ぬとき」
- ・鈴木穂（東京都）「ブスとたんこぶ」
- ・原田ゆう（東京都）「浮いていく背中に」
- ・南出謙吾（東京都）「終わってないし」
- ・横山拓也（大阪府）「流れんな」

五十音順

第2次審査会

平成27年12月6日（日） 公益財団法人北海道文化財団内 アートスペース

第2次審査員

- ・長田育恵（「演劇ユニットてがみ座」主宰）
- ・斎藤歩（「札幌座」チーフディレクター）
- ・土田英生（MONO 代表）
- ・畑澤聖悟（劇団「渡辺源四郎商店」主宰）
- ・前田司郎（五反田団 主宰）

五十音順

希望の大地の戯曲

北海道戯曲賞

平成 27 年度受賞作品集

発行日 平成 28 年 3 月

発行 北海道舞台塾実行委員会

(公益財団法人北海道文化財団、北海道)

〒 060-0042

札幌市中央区大通西 5 丁目 11 大五ビル 3F

TEL 011-272-0501 / FAX 011-272-0400

(公益財団法人北海道文化財団内)

デザイン 白馬堂印刷株式会社
印刷
